第22回青森県漁村青壮年婦人団体活動

実績発表大会資料

（昭和56年１月）

青　　森　　県

正　　誤　　表

頁　数	行　　目	正	誤
P　4	3　行　目	三慨村漁協	三慨村漁港
P　6	3　行　目	活　動　費	活　動　員
P　6	4　行　目	磯	礎
P12	15行　目	平　　均　　35.7%	平　　均　　35.4%
P12	16行　目	へい死率　　47.8%	へい死率　　57.9%
P12	16行　目	出現率　　26.5%	出現率　　46.5%
P15	第　4　表	へい死率平内地区平均　35.7%	35.4%
P27	13行　目	ヤ　リ　イ　カ	や　り　イ　カ
P33	8　行　目	愛　　称	受　　称
P34	表　1	花だんづくり	花だんぢくり
P42	18～19行目	鉄枠の折れ	鉄枠の折折れ
P43	17行　目	とおりであります	とおりあります
P ~~58~~ 49	22～23行目	わかりませんでした	わかりませでしした
P58	13行　目	転　　換	転　　要

第22回 青森県漁村青壮年婦人団体
活動実績発表大会開催要領

（目　　的）

第1. 県内漁村青壮年婦人団体の代表者が一堂に会し，知識の交換と活動意欲の向上をはかり沿岸漁業の振興及び漁村生活改善等に寄与することを目的とする。

（会　　場）

第2. 会場は発表会場を青森県農業会館大会議室とし，分科会会場は，青森県水産会館，青森県市町村職員共済会館とする。

（開催時期）

第3. 開催期日は，昭和56年1月13日～14日とする。

（行　事　等）

第4. 行事及び時間等は次のとおりとする。

月　日	時　間	行　事	場　所	備　考
1月13日（火）	13.00～13.10	開会あいさつ	農業会館大会議室	
	13.10～13.30	来賓祝辞		
	13.30～15.45	活動実績発表		発表時間 1人15分
	15.45～16.45	映画		映写時間 1本30分
	16.45～17.00	講評		
	17.00～17.15	知事賞，記念品授与		
1月14日（水）	9.00～12.00	分科会		
		・漁業技術	水産会館大会議室	
		・生活改善	市町村職員共済会館	

（参集範囲）

第5. 参集範囲は，県内の漁村青壮年婦人団体員，漁業協同組合員，市町村水産担当者等の水産関係者とする。

（審査委員の構成）

第6. 審査委員は次のとおりとする。

審査委員長

青森県水産部長	高谷善孝

審査副委員長

青森県水産部次長	竹内秀夫

審査委員

青森県漁政課長	日下部元慰智
青森県水産課長	田名部政春
青森県振興課長	斎藤健
青森県農務課長	工藤俊雄
青森県水産試験場長	馬場勝彦
青森県水産増殖センター所長	伊藤進
青森県水産物加工研究所長	掛端甲一
青森県水産修練所長	山形實
青森県水産事務所長	秋山俊孝
青森県漁業協同組合連合会長	植村正治
青森県信用漁業協同組合連合会長	山崎清五郎
青森県水産業改良普及会長	美濃谷久吾
青森県生活改善グループ連絡協議会長	田沢淑子
青森県漁協婦人部連絡協議会長	鳴海寿々子

（司会及び助言者）

第7. 司会及び助言者は，次のとおりとする。

発表大会

（司　　会）

鰺ケ沢地方水産業改良普及所長	長谷川馨

漁業技術分科会

（司　　会）

青森地方水産業改良普及所　主任	西山勝蔵

（助　言　者）

青森県水産課長	田名部政春
青森県振興課長	斎藤健
青森県水産試験場長	馬場勝彦
青森県水産増殖センター所長	伊藤進
青森県漁業協同組合連合会専務理事	三浦健一

生活改善分科会

（司　　会）

青森県専門技術員	今　　恵　子

（助　言　者）

青森県漁政課長	日下部　元慰智
青森県水産加工研究所長	掛　場　甲　一
青森県水産試験場淡水養殖部長	長　峰　良　典
青森県水産増殖センター漁場部長	高　橋　克　成
青森県主任専門技術員	原　子　昭　枝
青森県信用漁業協同組合連合会参事	高　杉　芳　暉

22回　目　次

発表課題	団体名及び発表者氏名	部門	頁
1. 手づくりで生活に豊かさを	三厩村漁港釜野沢婦人部 菊地キヌ	生活改善	5
2. ホタテガイ養殖 篭改良試験について	平内町漁協浦田漁業研究会 後藤憲悦	漁業技術	10
3. くらしの問題を他の団体との 連携で向上させる婦人部活動	野辺地町漁協婦人部 久保田てる	生活改善	17
4. クルマエビ中間育成 試験について	鰺ケ沢漁業研究会 田浦勇作	漁業技術	27
5. 明るい漁村を目指して	風間浦村さざなみ生活改善グループ 渡辺緑	生活改善	33
6. ヤリイカ産卵保護 試験について	小泊漁協青年部 葛西洋二	漁業技術	39
7. 私達の生活改善活動について	岩崎村漁協沢辺婦人部 堀内信子	生活改善	48
8. サケ，マス増殖のあゆみ	老部川内水面漁協 相内俊哉	漁業技術	56

1. 手づくりで生活に豊かさを

東郡三厩村字釜野沢
三厩村漁協婦人部釜野沢婦人部　菊　地　キ　ヌ

1. 地域の概要

三厩村は本州津軽半島の最北端に位置し，昔から漁業の村であると同時に風光明媚な場所も多く，海岸一帯は津軽国定公園として指定され，村でも観光行政に力を入れており，近年観光客の来村もめだって多くなってきております。又世紀の大事業といわれている青函海底トンネルの本州側基地として昭和46年に本工事が着工され，昭和57年完成を目ざして工事が進められています。

釜野沢部落は，三厩～竜飛間 18.5 Kのほぼ中間に位置し，国道 280 号線沿いで，前は三厩湾に面し，後はすぐ山がせまっており，山の上に畑を耕やし，自給程度の野菜を作付しています。部落の総戸数は63戸，人口は 269 人でそのうち総漁家戸数は52戸（正組合員37人，准組合員15人）平均家族数は4.27人となっています。

地区内の持船は船外機船73隻，動力船50隻で，漁業内容は前沖で１本づり，延縄，刺網等の他三厩コンブとりが行なわれています。

青函トンネル工事の始まる40年頃までは，生活基盤は漁業でありましたが，工事が始まるとともに入った，30社余りの企業体や公団などに雇用労働としてつとめているものが多くなっています。

交通機関は，三厩本村～竜飛まで１日６往復のバスが走っており，その他病人用の患者バスが今別町浜名～竜飛公園診療所へ運行しています。

年間の操業

項目＼月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
小型定置網	←→	←→	←→	←→								
マス		←→	←→	←→	←→							
エゴノリ							←→	←→				
テングサ						←→	←→	←→				
モズク						←→	←→	←→				
コンブ							20日から ←→	←→	←→			
ワカメ				←→	←→	←→						
ウニ	←→	←→	←→	←→								
カレイ	←→	←→	←→	←→								
スズキ							←→	←→	←→	←→		
ブリ									←→	←→	←→	
マグロ						←→	←→	←→	←→	←→	←→	
アワビ											2～3日間 ←→	
サザエ											2～3日間 ←→	
スルメイカ					25日から ←→	←→	←→	←→	←→	←→	←→	←→

2. 婦人部の設立

昭和32年三厩村漁協に婦人部が設立されると同時に地区ごとにも婦人部が結成され，釜野沢でも部員53名をもって結成しました。活動員は月100 円の会費と漁協からの助成金で運営しており結成当時から貯蓄や購買活動，海をきれいにする運動，磯掃除，農薬と肥料の共同購入など，三厩村漁協婦人部の事業計画に基づき部落の婦人活動も進められています。

3. 活動課題の選定

地区には漁協婦人部のほかに地域婦人会があり，漁協婦人部員は地域婦人会員でもあるので，冬期間になると1ヶ月に何回も開催される社会教育，学校関係等からの事業や講習会等同じような事が重なることが色々ありました。それで，地区では婦人達が1つにまとまって活動を進める必要があると思っていた時に，52年の9月頃，農業改良普及所から私達の部落に生活についてのアンケート調査を依頼されたので，これを機会に全戸を対象に調査を実施しました。

生活調査の結果（アンケート調査の結果）

問題となる主なものをひろってみると，健康状況では肩こりと腰痛を訴える人が約半数あった。

肩こり　男 56 %　女 74 %

腰　痛　男 46 %　女 50 %

食品の摂取状況では

インスタント食品や出来合いのおかずの利用	よく利用する	28 %	時々利用する	72 %
スタミナドリンク剤の利用	毎日のむ	16 %	2～3日に1回のむ	42 %
強化米や麦の利用	毎日食べる	4 %		
牛乳の摂取	毎日のむ	14 %		
卵の摂取	毎日食べる	5 %		
豆，豆製品の摂取	毎日食べる	15 %		
緑黄色野菜	毎日食べる	22 %		

自家野菜の処理状況では

ほとんど食べきる　30 %　畑ですてるものがある　6.2 %

料理の味つけでは

すっぱいものが好き　46 %

甘ったるいものが好き　25 %

辛いものが好き　15 %

家庭管理状況では

家計簿の記帳	記帳している	10 %	していない	90 %
生活の変化	苦しくなってきた	48 %	変らない	52 %
生活費の補充	日雇いに出る	78 %		

生活に対する不安

ある　56％　　不安を感じていることは

漁業経営について	30％
家族の健康	24％
家計のやりくり	24％
子供の教育	22％

となっている。

健康状況，食品の摂取状況，家庭管理状況等をアンケート調査の結果次のような問題点があることが指摘されました。

○健康状況では婦人が労働過重になっている。

○食事では，卵，牛乳，大豆製品，緑黄色野菜の摂取不足と塩分のとりすぎ，既成品の利用が多い自家生産物を上手に利用しておらず，疲れなどもドリンク剤を飲むことで気休めをしている。

○家庭管理では，生活設計がもちにくく，生活に無駄があり計画性にかけているなど，もっと細かく分けて説明されました。今まで気になっていたが生活習慣から改められないでいたこと，知らなかったこと，気づかずに過していたことなど，1つ1つがうなづけることばかりでした。そこで自分の生活は自分で改善し，守ってゆかなければと話し合いの結果，関係機関の協力を得て，婦人部活動と一緒に次のような目標を決め，計画活動をしていくことにしました。

それは「家族が健康で子供がすこやかに育ち，安心して働ける明るい家庭づくり」

「生活に無理，むら，無駄をなくし，将来の見通しをもった健全な家庭づくり」という目標です。

4. 活　動　状　況

53年には自家生産物の無駄をなくするように上手な利用方法を学び，既成食品の利用をなるべく少なくし，健康を考えた手づくりの食事づくりなどの講習会を開いて勉強しました。今は大型の冷蔵庫を入れている家もあるので，魚の他にそのままでは貯蔵のきかない青菜類も茹でて1回分ずつ小分けにして入れておき冬期間に利用したり，その都度作るのが面倒なもの（例えば，あんやジャム）は1度に多く作って冷凍しておくとか，それぞれの家庭で工夫しています。

54年の活動は53年に引きつづき健康を主体にしたものでしたが，子供に関することも入れました。子供は親の後姿を見て育つと言われていますが子供の躾，健康管理は親が自分の生活をしっかりやらなければならないことなので，まず生活を見なおし，お金をかけなくてもなるべく親の手をかけた心のこもった生活が出来るように努力することにした。

55年は住みよい環境づくりを心がけながら部落全体の連帯意識を深め，計画的な生活が出来るように冬期間には学習会をもって勉強してゆく計画です。

活　動　状　況

年度内容 項目	53　年　度	54　年　度	55　年　度
生産関係	○のりを育てるための磯掃除 ○青森魚市場の見学研修 ○船上作業用の補助衣の作成（ぼうし，手袋） ○農薬，肥料，種子の共同購入 ○野菜の上手な作り方	○のりを育てるための磯掃除 ○農業試験場見学研修 ○作業時の防寒の工夫 ○農薬，肥料，種子の共同購入 ○野菜の計画栽培	○農薬，肥料，種子の共同購入 ○売れる野菜の作り方
生活関係	○健康管理について ○インスタント食品の欠点と利用方法 ○野菜，魚を使った料理の作り方 ○わかめの貯蔵の仕方 ○上手なつけものの漬け方	○子供の発育と栄養の確保 ○手づくりのおやつの作り方 ○天然食品の利用 ○衣料品の共同購入 ○衣服のリフォームと小物づくり ○健康づくりのための踊 ○子供のための貯金のすすめ方 ○着つけ教室	○食品の見直し ○家計簿記帳 ○労働に合った食事づくり ○手づくり衣服の着用
その他	○海をきれいにする運動 ○見舞がえし廃止運動 ○おたのしみ貯金 ○夜まわり ○敬老の日の慰安会	○合成洗剤追放運動 ○漁船海難遺児のための募金運動 ○婦人スポーツのつどい参加 ○養護施設の慰問 ○国保と保険税の学習会 ○火災防止の講習会 ○ＬＰガスの安全なとりつけ方 ○いかつり部会の慰労 ○夜まわり	○対話集会 ○愛の１口運動 ○夜まわり ○老人ホームの慰問 ○合成洗剤追放運動

5. 効果と問題点

私達の生活の基盤は海であり，何よりの資本は健康でありますので，健康管理を考えた活動をしてきました。これまで食べる事，着るもの全てが既成品の利用が多く出費も多くかかりました。自分たちの健康を考え，無公害の自然食品を利用することを考えれば，私達が自分で育てた畑作物や海の幸をいかに上手に利用するかにかかっています。着るにしても食べるにしても手づくりをするということは時間と労力のかかることですが，そこには家庭の暖かさがあり，潤いがあります。金銭的な豊かさよりも精神的な豊かさが必要な時ではないかと考え，健全で明るい家庭づくりを目標にしてきましたが，精神的なことは直接目に見えないだけに，時間がかかるようです。しかし手づくりの良さはだんだん家族にも理解されてきており，何より子供達が喜んでくれるので苦労のしがいがあると思っています。

冬期間でなければまとめた集会が持ちにくいこと，保存方法のこともあり年間を通して自家用野菜が食べられないこと，冬期間以外は主婦は労働過重になりやすいこと等，まだまだ解決が必要な問題点がいくつかありますが，今後は計画が立ちにくいと言われている漁家に計画性をもたせ，将来見通しのある予算生活が出来ればと夢をもっています。

2. ホタテガイ養殖篭改良試験

平内町漁協浦田漁業研究会　後　藤　憲　悦

1. 地域の概要

平内町は，陸奥湾中央部に位置し，西側は青森市，東側は野辺地町に隣接しており，世帯数，4,509世帯，人口18,363人で農林漁業を営む第1次産業が主体の町である。私達の住む浦田は，春から夏にかけて海水浴など行楽や涼を求めて集る観光客で賑わう夏泊半島の青森湾に面していて，国道4号線から北に9㎞入ったところに位置し，世帯数107世帯，人口563人の小さな集落でホタテガイ養殖業を営むかたわら自家消費程度の田畑を耕作している。

2. 漁業の概要

平内町漁業協同組合は，6つの支所からなり，組合員数1,231名（正組合員1,195名，准組合員36名）でそのうち養殖経営体数は879経営体となっている。漁船数は3トン未満722隻，3～5トン577隻，5トン以上5隻の計1,304隻である。

浦田支所は，組合員数144名，養殖経営体数104経営体となっており漁船数は3トン未満，101隻，3～5トン75隻の計176隻である。昭和54年度，漁協販売取扱高は生産量約1万5千トン，生産金額36億8千万円でうちホタテガイは約1万3,500トン，30億7千万円となっており，ホタテガイの占める割合は数量で90％金額で83％である。浦田支所は，約2,500トン，6億1千万円で，うちホタテガイが約2,300トン，5億3,400万円で，支所の生産のうち，数量で91％，金額で84％になっていて，漁協全体の1経営体当りの販売取扱高を100とすると，浦田支所の指数は数量で144，金額で147となっている。

3. 研究会の組織および運営

平内町漁業協同組合には支所単位に6研究会で構成されている平内町漁業研究会があり，会費，漁協の助成金併せて156万円の予算をもって活動をしている。私達の浦田漁業研究会は，支所単位で構成され会員14名（平均年令37才）で会費，支所助成金，事業収入など107万円の予算をもってホタテガイ，アカガイの増養殖管理技術の試験のほか，関係機関，漁協，支所の共同または独自で調査事業を行っている。昭和54年度には，県，町，漁協併せて70万円の予算で，ホタテガイ養殖篭改良実証試験を実施した。

4. 活動課題選定の動機

浦田地区の主要漁業であるホタテガイ養殖は，昭和50年から異常へい死を起し，生産量は最盛期であった昭和49年の約2,900トンから，昭和51年は580トン，昭和52年は587トンと昭和49年の20％まで減少した。異常へい死の現象はホタテガイに欠刻や内面着色という症状が出て，1個体当り

の重さがへりやがては死に至るもので，パールネットや丸篭に収容され，垂下してから，かみ合い接触によって貝殻周辺や，外套膜が傷つけられる等により起りやすいと言われている。

県水産増殖センターでは，稚貝採取から本養殖まで，ホタテガイを殺さない養殖技術を開発のために適正密度の養殖試験を行ない，昭和51年から53年にかけて接着剤でホタテガイを固定して養殖を行ったところ，異常貝の発生，へい死がほとんどなく好成績であると発表された。私達グループはこの発表をもとに再三検討の結果，莫大な資金を投じて購入した養殖資材を高度に活用するために現在使用しているパールネットの改良試作品を考え養殖試験を行ったものである。

5. 試験の経緯

1）昭和54年度の経緯

自然に育つホタテガイは，海底の砂にくぼみをつくり，その上に静かに生息していることから，ホタテガイがパールネット内で安定して生息できる枠をつくることに着目した。（図1参照）

従来のパールネットは，底部をタキロン被覆針金で田の字型に組んで4区画に分割されていて，収容した稚貝は或る程度分散されているが潮流が速くなる等して篭が傾くと，稚貝がネットの一方にかたよることが多い。そこで底面の仕切りを多くしてホタテガイがその区画に1個ずつ収まるようにすれば，かみ合いや接触がなく，ひいては密殖防止にもなるのではないかと考え，昭和53年に針金4本を新しく追加して底面を16区画に分割試作して試験を行ったところ，田の字型よりよい結果がでたことから，昭和54年4月，漁業後継者対策事業の一環として県からの助成金と町，漁協の援助で養殖施設1ケ統を設置して改良した3分目パールネット（以下改良篭(小)という）に53年産稚貝を16個ずつ収容し1連当り7段として200連垂下した。

試験結果

試験終了の10月19日までに成長調査，潜水調査を6回行った。その結果は（第1表参照）4月始めに改良篭(小)に16個ずつ収容したホタテガイの殻長は10月19日には7.9～9.5㎝平均8.9㎝，重量は59～110㌘平均82㌘となり，異常貝は観察されず，へい死率は6.7％であった。これを同時期に行った陸奥湾ホタテガイ養殖実態調査の結果（第2表参照）と比較してみると，陸奥湾平均では，へい死率24％，異常貝出現率10.5％であったので非常に良い成績をあげることが出来た。また9月14日，水中での篭の状態を観察するために潜水調査を行ったが写真（別添）でみられるように改良篭(小)のホタテガイは区画にほぼ1個ずつ収まっていたが，パールネットのものは篭の一方にかたまっているものが多かった。この点からも改良篭(小)は当初考えたように自然の状態で安定していることがわかった。

2）昭和55年度

昭和54年度試験の再確認と改良篭(小)の底面を16区画に分割した。1区画の大きさは8.5×8.5㎝であり，次の分散9～10月にはホタテガイの殻長が平均8.5㎝を超えるため区画外にはみ出して成長が阻害されることが考えられたので1区画の大きさを10×10㎝の篭を試作することにした。ところが網地が規格外になるためメーカーに問合せたところすでに町内の或る養殖業者の注文により同一の試作品（以下改良篭(大)と言う）ができており，それを譲り受けたが底面部分の網が張

目のため一部手直して比較してみることにした。

尚，この試験は会員全員が54年産稚貝を持ち寄り，改良篭(大)，改良篭(小)，パールネット，丸篭にそれぞれ収容して1ヶ統に138連垂下して実施した。

試　験　結　果

試験開始4月14日試験終了9月18日までの成長調査の結果は（第3表参照）改良篭(大)が平均で殻長8.7㎝重量72.5ｇとなり，殻長，重量共に4種類の篭のうちで最高を示しており，次いで，改良篭(小)，丸篭，パールネットの順となった。へい死率では改良篭(大)が8％，改良篭(小)は24％で，パールネット，丸篭は34～36.6％となっており，異常率では改良篭(大)0％，改良篭(小)が10％，丸篭，パールネットは16.7～30.3％であった。この結果からも改良篭の成績がよいことを裏づけている。

一方同じ改良篭(大)でも陸上作業により収容したものは，へい死率，異常貝出現率共に高くなっており稚貝に衝撃を与えたり長時間空気中に露出することはホタテガイにとって悪影響を与えることが明らかであった。

昭和54年度の試験で改良篭(小)のへい死率6.7％異常貝出現率0％に対して，昭和55年度試験のへい死率，異常貝出現率が高い理由としては10月に行われた陸奥湾ホタテガイ実態調査結果のうち平内地区（第4表参照）は，へい死率が平均35.4％異常貝出現率が20.3％であり，特に浦田地区では，双子島から大島を結ぶ線から内側ではへい死率57.9％異常貝出現率46.5％にも達していた。併せて55年産稚貝も前例のないへい死現象が起きておりまた試験に供された漁場は双子島沖300ｍの地点であることと，持ち寄り稚貝で一定しなかったことなどがあげられる。このような状況からみると試験貝のへい死率，異常貝出現率は決して悪いものでなく評価に値いするものと考えている。

6. 波　及　効　果

本試験は，ホタテガイ養殖の中間育成の課程において，安定を保つことにより，へい死貝，異常貝の発生防止と密殖防止にもつながるとの発想から3年間に亘り行ったもので，町，及び漁協においてもその成果を認め他の3支所の研究会にも実証試験を行なわせている外一般漁業者にも波及しつつある。

7. 今後の計画と問題点

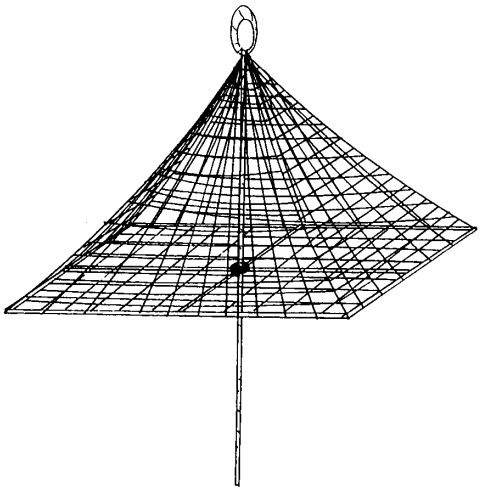
現在，改良篭の使用期間は3～10月であり，その後丸篭に入換えて増重の促進を図り翌々年の1～4月までに出荷している。最近耳吊り養殖が成長，歩留り共によいことから，盛んになって来たが，早いものは1月頃から作業に入るため，耳吊り養殖の期間が長くなり，それだけイガイ，フジツボなど成長を阻害する付着生物が付着するので，施設の管理，収穫作業がはんざつになるばかりでなく値段にも影響している。

また，1本のロープに連結されるため丸篭，パールネットのように垂下間隔をとる必要がなく，ますます密殖になること，付着生物による漁場汚染の心配もでてくることなどの問題点がある。今後の課題として改良篭と耳吊りを組み合せた養殖方法が残されているものと考えられる。

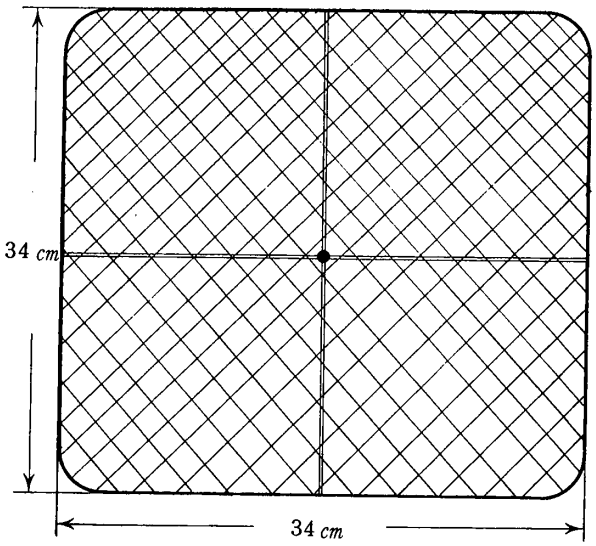
最後に，本試験をご指導くださった水産業改良普及員に厚くお礼申し上げると共に自然の戦いで

あるためこれからもどのような難問題が発生するかわからないが今後も頑張っていく決意であるので尚一層のご指導，ご鞭撻の程をよろしくお願いする。

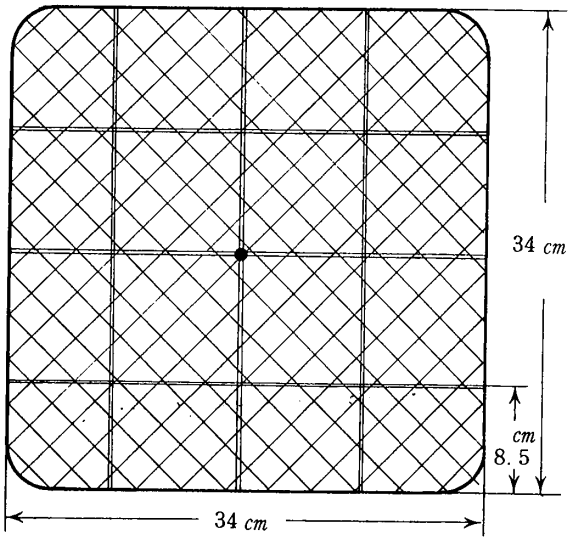
パールネット



パールネットの底面
改良前

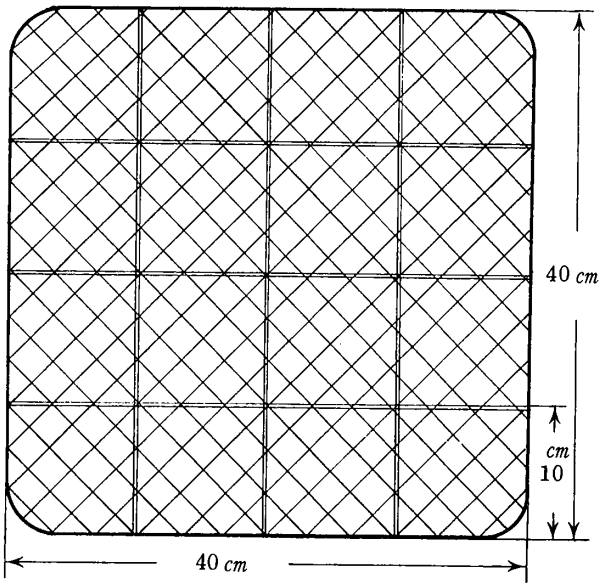


研究会の試作品
改良後（改良篭(小)）

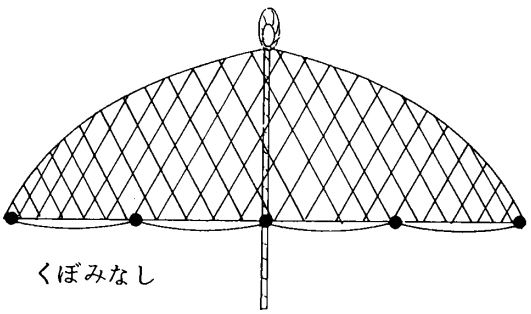


底面網地の張目

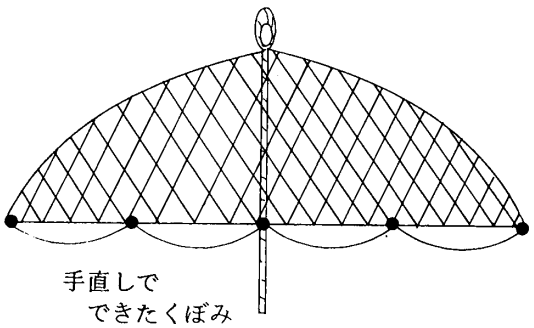
メーカーの試作品
（改良篭(大)）



底面網地の縮結（いせ）



くぼみなし



手直しで
できたくぼみ

第1図　パールネットの改良図

第1表　昭和54年度成長調査結果

調査月日	平均殻長（範囲）cm	平均重量（範囲）g	異常貝出現率%		へい死率%
			内面欠刻	欠刻	
4月12日	6.5（6.0～7.0）	34（29～42）	0	0	0
6月1日	7.7（6.9～8.4）	50（39～62）	0	0	0
7月9日	8.3（7.8～8.9）	69（60～85）	0	0	0
9月1日	8.6（6.2～9.7）	71（50～100）	6.8	6.8	5.4
10月19日	8.9（7.9～9.5）	82（59～110）	0	0	6.7

第2表　陸奥湾養殖ホタテガイ実態調査結果

54. 10. 15 ～ 23

地区	へい死率%	異常貝出現率%
上磯	36.7（1.6～84.0）	17.5（0～87.4）
青森	23.1（0～98.1）	8.2（0～100）
平内	21.0（2.2～85.0）	7.3（0～72）
上北	20.7（0～66.0）	13.9（0～62）
下北	18.8（0～55.8）	13.8（0～40）
全湾	24.0（0～98.1）	10.5（0～100）

第3表　昭和55年度成長調査結果

試験期間　昭和55年4月14日～9月18日

試験開始時の平均殻長6.42 cm　平均重量29.7 g　異常貝出現率3.3 %

篭の種類	収容数	測定個数	へい死率 %	異常貝出現率 %	平均殻長（範囲）cm	平均重量（範囲）g	備考
改良篭(大)	16	112	8.0	0	8.7 (8.0～9.2)	73.5 (56～82)	いせを入れたもの
〃（大）	16	48	25.0	12.0	—	—	陸上作業
〃（小）	16	400	24.0	10.0	8.4 (7.1～9.5)	70.0 (48～92)	
パールネット	12.5	50	34.0	30.3	7.9 (6.8～9.0)	56.1 (39～77)	
丸篭	15	1,050	36.6	16.7	8.4 (7.5～9.0)	62.0 (49～80)	

註　異常貝出現率，殻長，重量の測定は30個

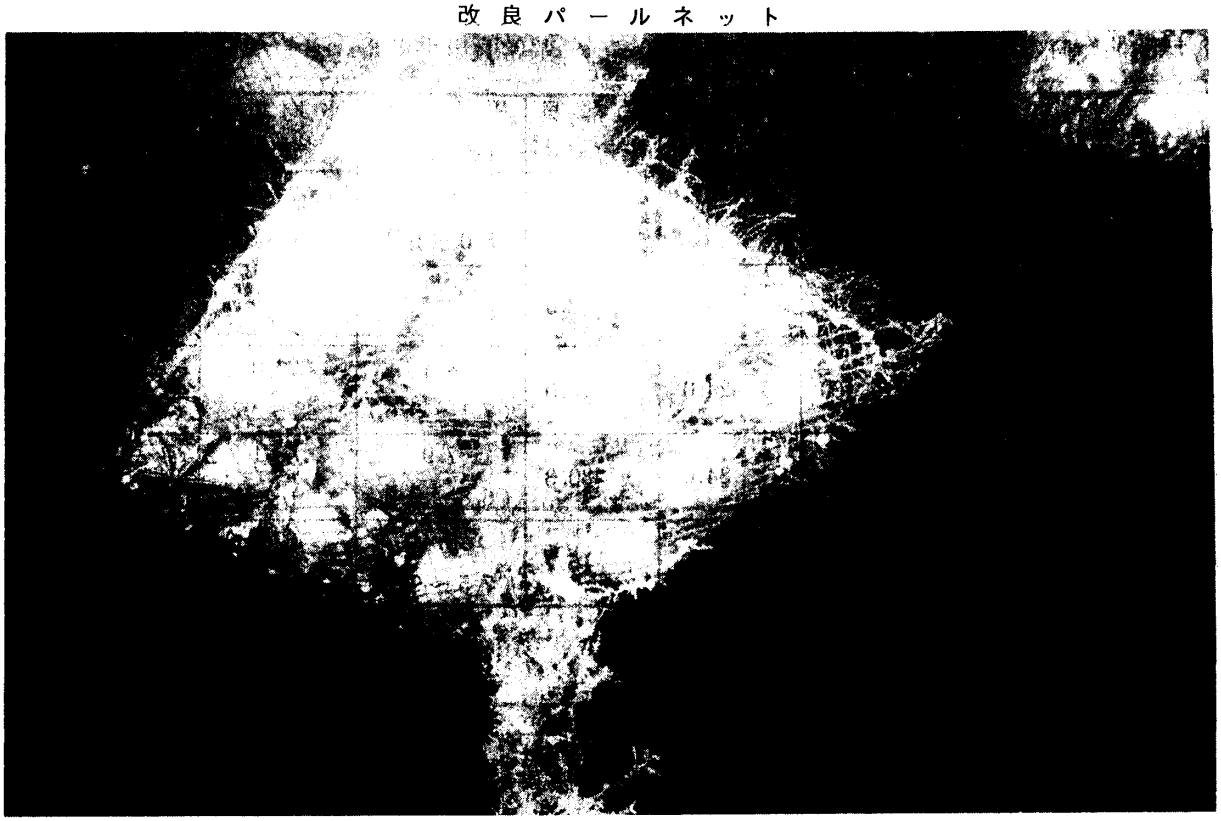
第4表　過去4ケ年間の平内地区養殖ホタテガイ実態調査結果

各年10月調査

調査項目	調査年度	土屋	茂浦	浦田	東田沢	小湊	清水川	平内地区平均
へい死率 %	52	81.1	—	64.6	77.6	81.0	84.0	74.7
	53	35.2	52.8	71.9	23.0	40.9	19.7	35.1
	54	13.4	11.4	21.5	10.6	48.4	20.2	21.0
	55	47.4	0	57.9	31.8	19.7	45.6	35.4
異常貝出現率 %	52	61.1	—	29.3	24.4	61.7	78.1	42.1
	53	6.0	3.0	5.8	2.4	7.2	6.2	4.3
	54	10.8	6.9	6.6	4.5	24.4	4.9	7.3
	55	35.0	2.0	46.5	12.7	27.2	55.4	20.3

昭和54年9月14日　浦　田　改良籠試験

改良パールネット



普通パールネット

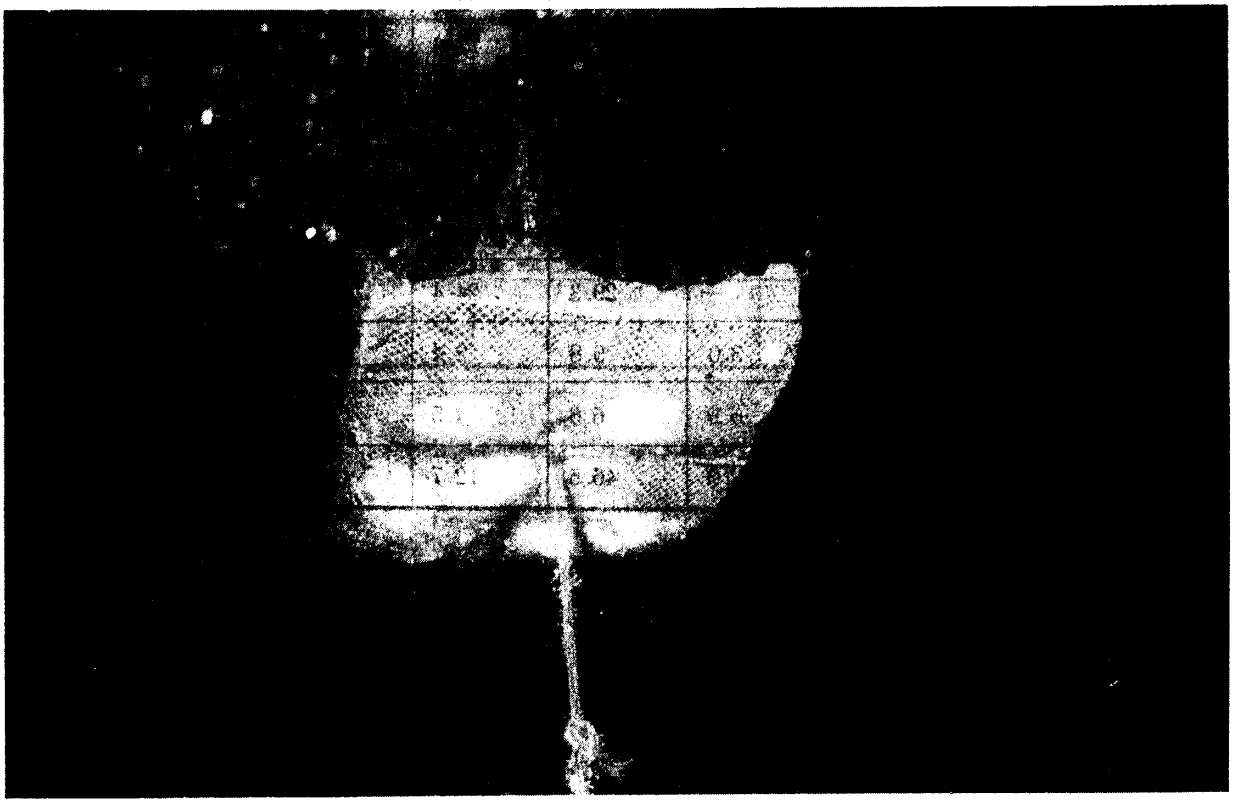


写真　海中でのホタテガイの状態（昭和54年9月14日撮影）

3. くらしの問題を他団体との連携で向上させる婦人部活動

町辺地町漁協婦人部
久保田　て　る

1. 町の概況と漁業形態

私達の住む野辺地町は，陸奥湾に面した人口１万９千人の町で，県の２大文化圏の津軽と南部の境界に位置しています。また，下北半島の玄関口であります。北海道と結ぶフェリーが就航するなど交通の要衝となっています。歴史的にみますと港町として栄えたことから，町のお祭りには現在なお上方的文化の名残りである祇園ばやし等が残されています。そして漁業面では遠洋や沖合漁業従事者の多い町であり，集落はほとんど陸奥湾に面した海岸沿いに立地し，そのうち漁家集落は次のようになっています。（表１）

主な漁業はホタテガイ養殖で，ホタテガイで全漁獲の87％を占めています。次の表は漁獲割合をあらわしたものです。（表２）

皆さんもご存知のように50年に陸奥湾では養殖ホタテガイの異常へい死が発生し，養殖ホタテガイの80％がへい死し私達漁家も打撃を受けましたが，幸い，組合共同事業でやっている「地まき増殖」で何とか切り抜けました。ホタテガイの漁獲金額の50％以上が地まきで占めているのが，野辺地漁業の特徴になっています。

2. 婦人部結成の経緯とくらしの実態

多くの婦人が漁業労働に従事するようになったのは，ホタテガイ養殖の導入後であります。

漁業労働における婦人の依存度が高い割に婦人達の意識高揚がみられなかったことが要因の一つで婦人部の結成がおくれ，やっと誕生できたのが昭和51年11月です。活動してまだ日が浅いのですが，問題をかかえながらも計画的に活動にとりくんでいます。

私達婦人が漁業労働に従事するようになって，家の中での発言権が増えました。漁業経営に対して意識が向上しました。が反面，表３～表６までのようにくらしの問題が多くなっています。中でも過重労働による健康の問題。家事育児に十分な時間がとれないという家庭管理上の問題が調査により解りました。学童の鍵っ子問題，少年の放任問題が，持ち上がってきておりますので，社会的な関心をよびおこす必要があります。主婦の疲労から手作りのくらしを忘れ，食事一つとっても作る主婦から買う，並べる主婦へ。既製品に頼る消費生活などです。

これらの問題解決の手段は，婦人の結束による共同解決以外にないと思います。組織の力で解決しようと 203 名の婦人が寄り合って，結成にこぎつけたのが今から４年前のことでした。

3. 活動目標と組織体制及び活動内容

活動の３本柱を次のようにかかげています。

① 健康で豊かなくらしの創造

② 漁村を住みよくするための生活環境改善

③ 漁村婦人の地位の向上

次の表7は婦人部の組織ですが，特徴は文化更生部の中に山積している漁家のくらしの問題をとりあげ推進役となる生活改善係を設けながら関係機関や他団体（生活改善グループ，農協婦人部，婦人会，若妻会等）との連携により共同で計画を立て，役割分担をしながら広く活動していることです。

野辺地町管内には，生活指導機関として，農業改良普及所，農，漁協，公民館，等ありますが，指導者間の連携もうまくいっており指導者連絡協議会が定期的に開かれておりますので各団体の連絡調整が行われ，昨年から共同活動が行われるようになりました。もちろんそれぞれの団体の特色ある活動は独自で実施していますが，共通的なものについては役員会や指導者会で話し合って実行しています。したがって私達漁協婦人部も単に漁家同志や，野辺地町にとどまることなく，管内3町1村の婦人部の仲間と共に活動に参加し，また，多くの方々から指導をうけながら活動を続けています。次の表8は51年～55年までの活動内容ですが◎印が共同活動の事例です。①栄養の講座，②健康問題シリーズ講座，③衣類のリフォーム講座，④体力づくり登山，⑤婦人団体のリーダー研修会，⑥農漁家のくらしを見直す研究集会，そして最近では地域の特産物の消費拡大キャンペーンへの参加など巾の広い活動で，くらしの改善や部員の結束に役立っています。

4. 活動の成果と問題

3年少しの活動では大きな問題の解決も変化と呼べる事項も少ないのですが，

① 自分で話すこと，他人の話を聞くことが出来るようになってきたこと。

② 部員同志の人間関係が密接になってきたこと。

③ 会合の出席率も年々よくなってきたこと。

④ 主婦であるという自覚から，食生活その他家庭のあり方に工夫がみられてきたこと。

⑤ 健康問題には強い関心がみられ，体力づくりにつとめるようになったこと。

⑥ 各種の活動で得た知識や技術をくらしの中にとり入れるようになってきたこと。

⑦ 漁業問題をはじめ，社会問題にも関心を持つようになったこと等です。

このように少しづつ部員に変化が出はじめております。

一方問題点としては，

① 婦人部の役員になりたがらないこと。

② 月一回の定休日も天気に左右されるので，婦人部活動に思うように参加できないこと。

③ 漁家集落が3学区にまたがっているため，学校行事との関係で活動日程の調整がむずかしいこと等があります。

5. 活動に対する部員の意向

3ヶ年間の活動の中心は健康対策であったことから，部員の意向を把握するために，昨年アンケ

ート調査をしてみました。そのまとめが，表の9です。やはり健康問題に関心がみられると同時に今後の継続活動の課題になりそうです。

6. 今後の活動目標

今後の活動目標としては，

① 部員の意向をふまえて健康対策にとりくむ。

② 組合事業従事期間の託児所の開設。

③ 海産物，農産物，畜産物の定期的なマーケットの開設。

④ 手造りによるくらしの創造のため，知識技術の修得をはかる。

⑤ 健康のためのレクレーション活動の推進。

⑥ ホタテガイ細工の技術開発による商品化。

⑦ 他団体との共同活動の推進。等検討中です

7. ま と め

今後も漁業労働における役割は増加の傾向にありますが，漁協における婦人部の役割を確認しながら，部員みんなで立てた活動の目標にそって，関係機関のご指導を得て，積極的に推進していきたいと思います。

以上で報告を終ります。

表1 集落別組合員数（昭和55年度現在）

集落名	戸数	組合員数	組合員数 戸数×100	婦人部員数
浜町・新道	385	129	33.5	47
金沢	537	51	9.5	32
馬門	538	158	29.4	78
有戸	129	43	33.3	20
計	1,589	381	24.0	177

表2 漁獲割合（昭和53年度）

漁種別	割合(%)
ほたて	87.0 %
なまこ	3.4 〃
うに	3.2 〃
かれい	1.6 〃
その他	4.8 〃

表3 A. ほたて夫婦共乗り事例

※家族構成 夫（38歳）ほたて養殖他 ※家事，育児へ時間をとりたい希望

妻（37歳） 〃

子供1人（10歳）

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

睡眠	朝食弁当の準備	操業（水揚作業） 子供朝食 朝食船上 昼食船上	買物・夕食準備	夕食・片付け	テレビ	子供の世話 入浴	睡眠

表4　B．ほたて陸上作業従事事例

※家族構成　夫（53歳）ほたて養殖他　　嫁（26歳）

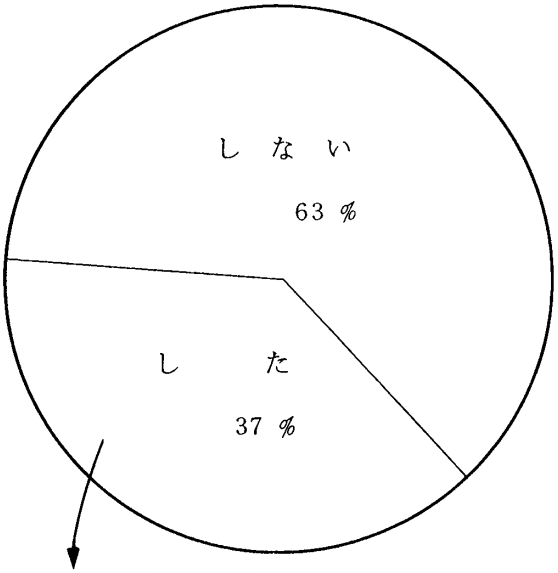
本人（48歳）陸上作業　　孫2人（5歳，1歳）

長男（29歳）夫と同　　※家事は全んど嫁がやる

0 1 2 3	4	5	6	7 8 9 10 11 12	1	2 3 4	5	6	7	8	9 10	11 12
睡眠	朝食 主人弁当準備	出港手伝い	朝食・片付け	陸上作業（かご洗い）	昼食	陸上作業	夕食準備	水揚げ	出漁準備	食事・片付け	テレビ 飲酒など	睡眠

表5　主婦の健康問題（51年調べ）　　203名中132名回答（65％回収率）

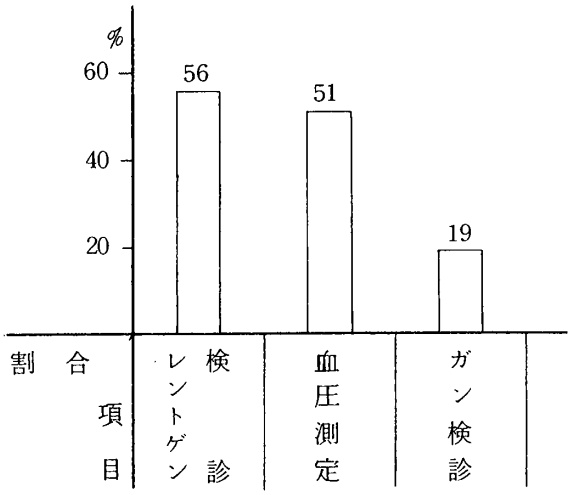
① この一年間に病気やけがをしましたか



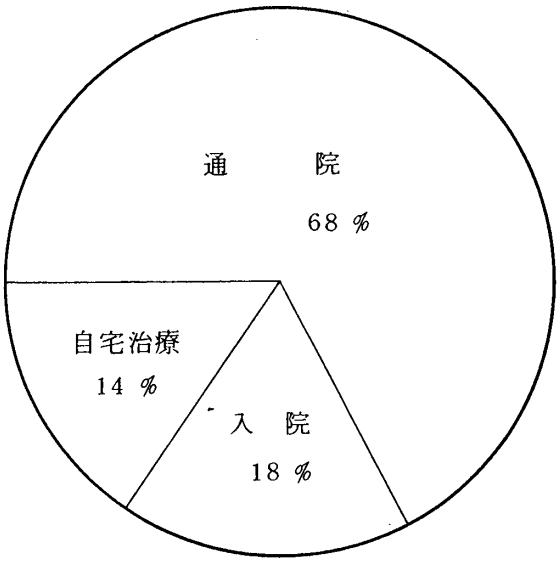
② 病気の内訳

順位	病名	件数
1位	神経系統	16件
2位	皮膚	10
3位	必尿	10
4位	胃腸病	9
5位	外傷	8
6位	婦人病	5
7位	呼吸器病	4
8位	その他	4
9位	耳鼻咽こう	3
9位	循環器系	1

④ 健康診断の内訳



③ 治療の方法は



⑤ あなたは次のような自覚症状がありますか

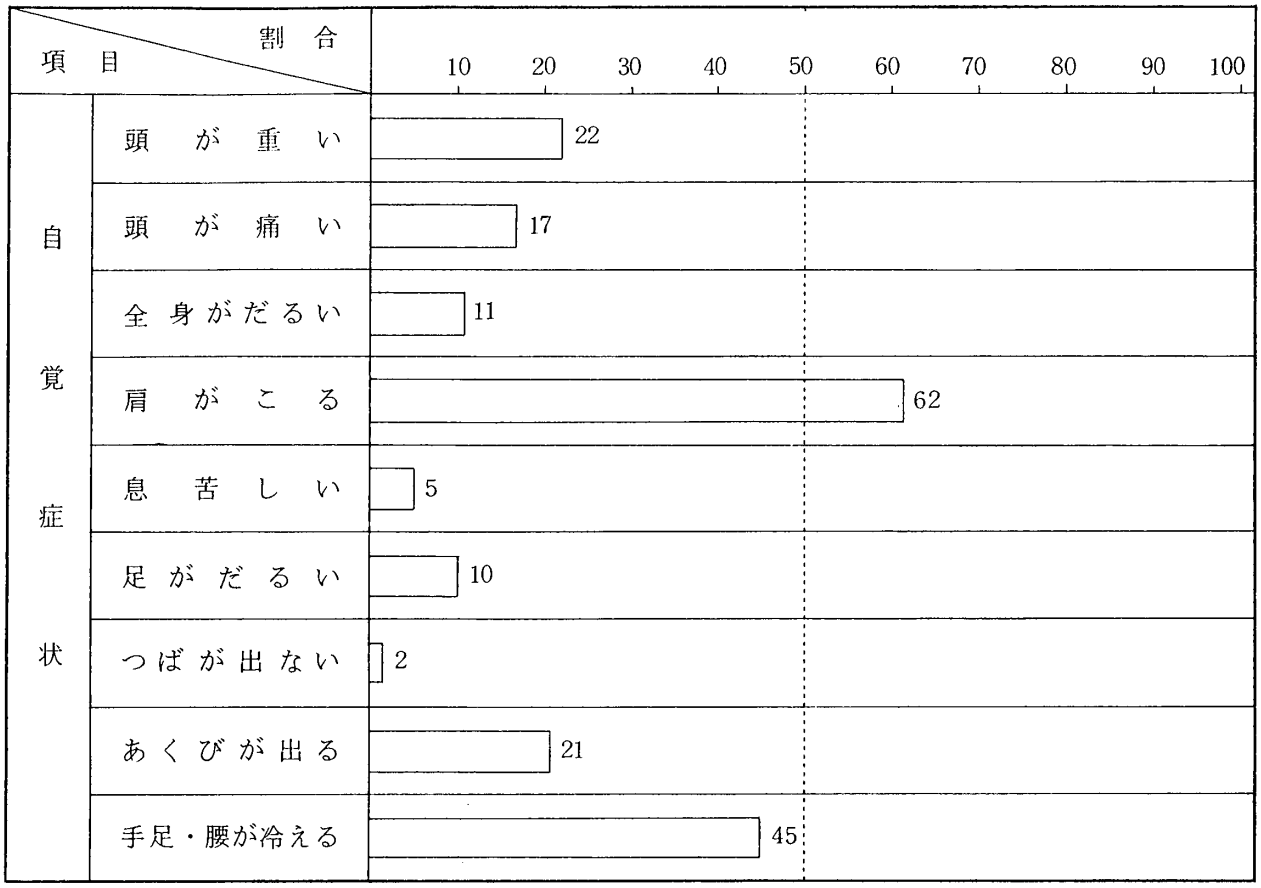
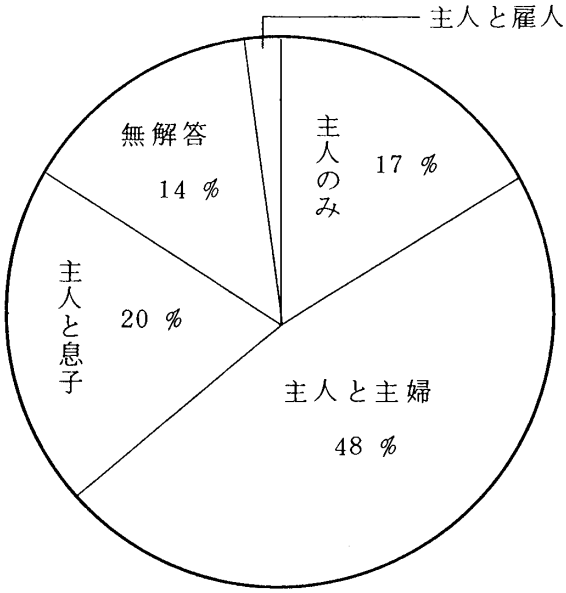


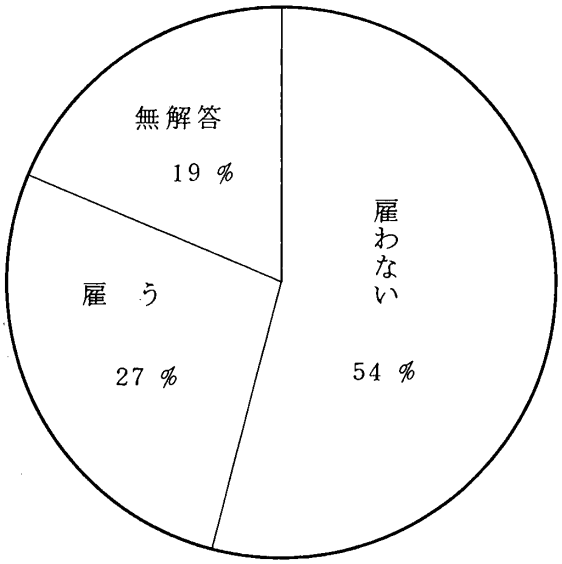
表6　労働状況と家庭運営

① 出漁従事状況

出漁の時は誰と行くか。

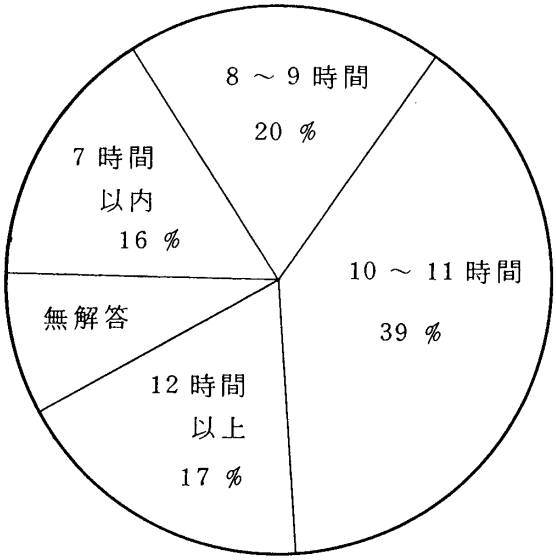


漁業経営の上で人を雇うか。

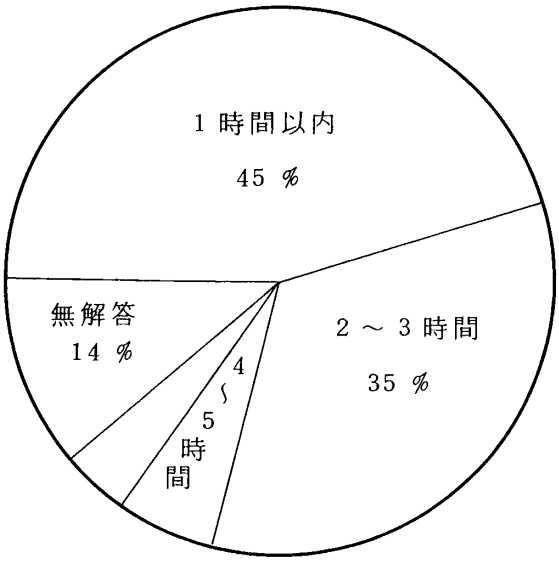


② お宅の労働時間は （盛漁期）

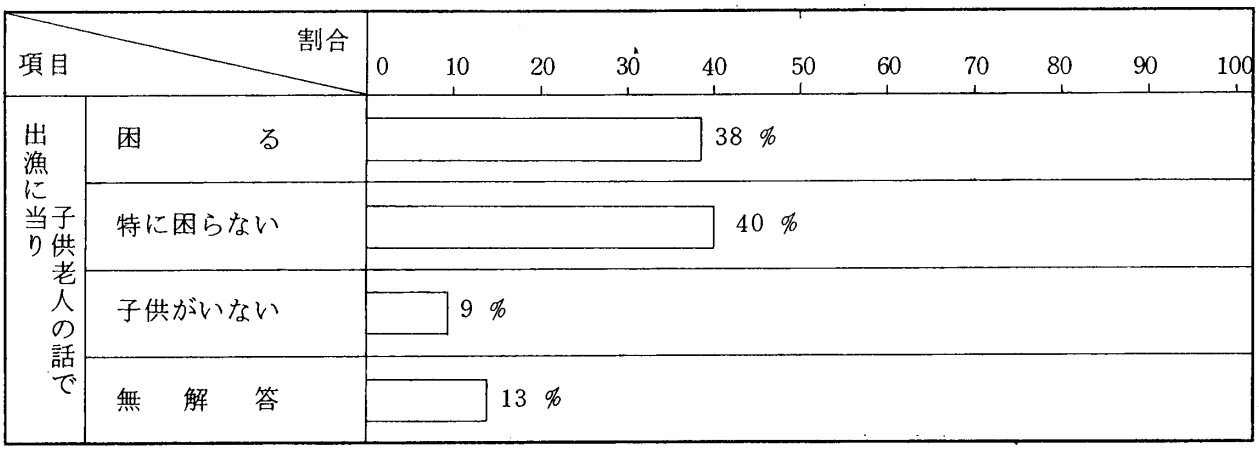
労働時間



炊事時間



③ 育児の問題

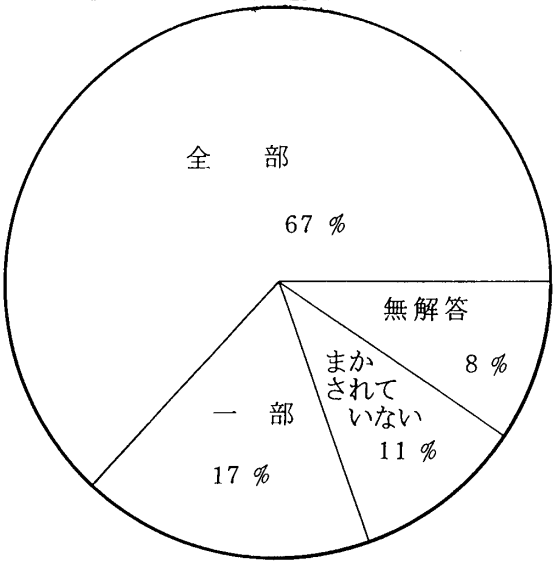


④ 悩みごとの多い順

漁業をしたがらない 36 %	その他 34 %	嫁がいない 24 %	6 %

子供がいない

⑤ 家計費をまかされているか



家計のやりくりで困るのは

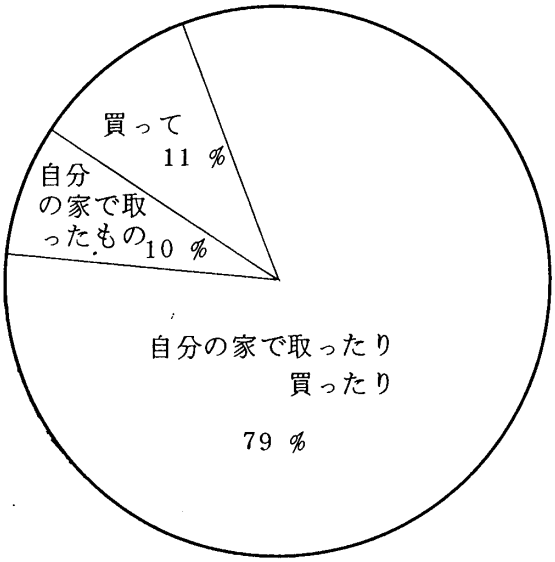
1位　飲　食　費　(44 %)
2位　交　際　費　(39 %)
3位　住居家財費　(11 %)
4位　光　熱　費　(7 %)

⑥ お宅の食事で足りない食品は，―食事診断結果
(上位3位まで)

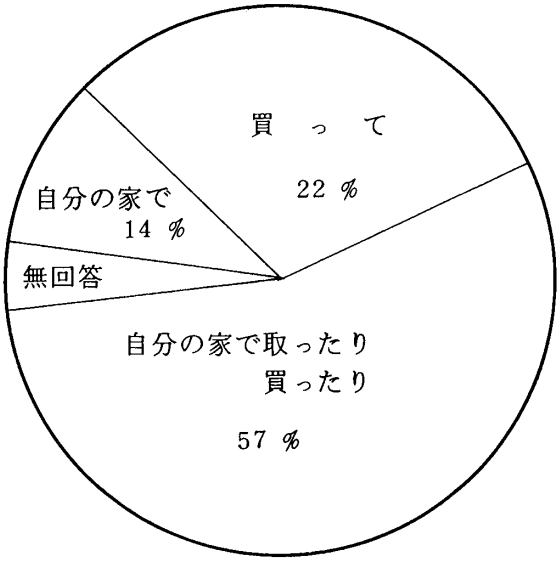
1　位	乳　製　品
2　位	緑黄やさい
3　位	淡色やさい

⑦ 自給食品の状況

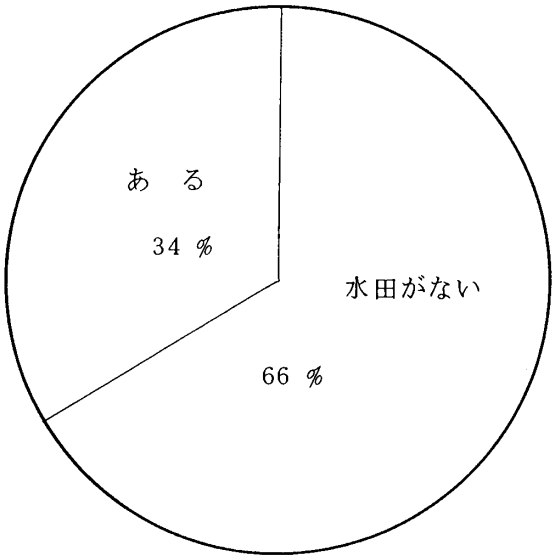
毎日の魚は



毎日のやさいは



⑧ お宅では農業もやっていますか



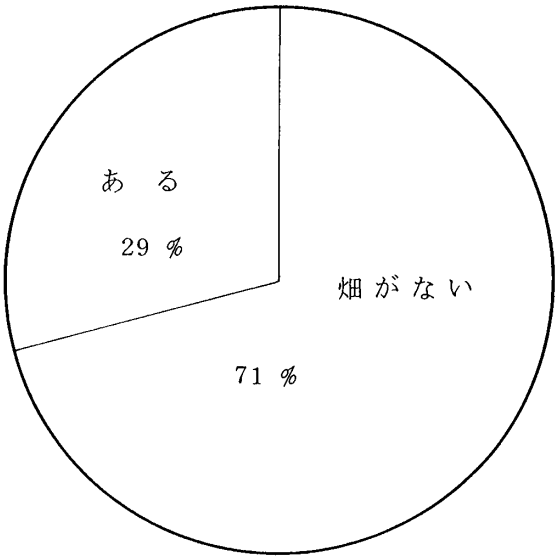


表7　組　織　体　制

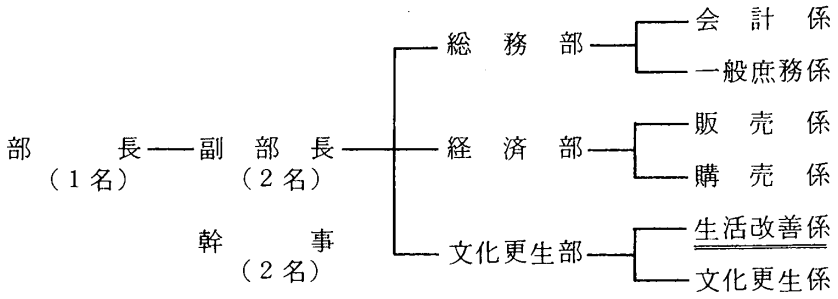


表8　主な継続活動内容（昭和51～55年）

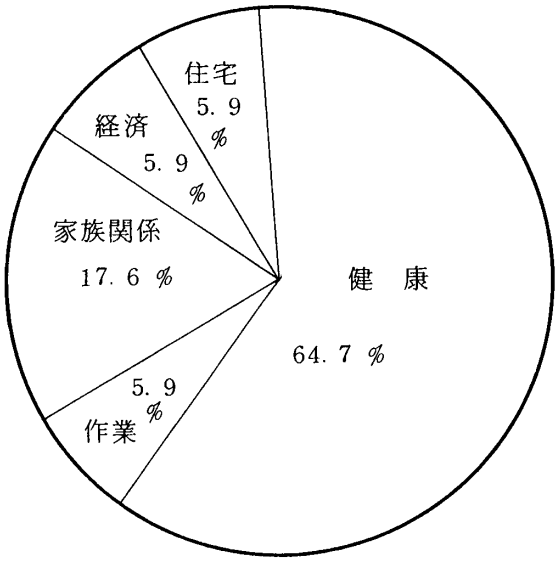
総務部	経済部	文化更生部
1. 毎月15日漁休日の設定	1. 経済講演会	1. 健康問題シリーズ講座（食事診断，健康診断，マッサージ）
2. 総会	2. 積立貯金の実施	② 食生活講座（栄養，家計簿記帳，献立調理，その他）
3. 漁民大運動会	3. 青色申告の講習会	③ 衣類のリフォーム（リフォーム，着付）
④ くらしの工夫展	4. ビタライスの購入	4. 文化講演会
⑤ 各団体との活動調整（共同活動）	4. 缶ジュース，鶏卵，お茶，石けん，秋野菜，防寒衣類，ゴム靴の販売	5. 婦人部の歌づくり
6. 漁家生活実態調査		⑥ 体力づくり登山
7. 部員活動意向調査		7. 交通安全キャンペーン
⑧ 婦人団体リーダー研修会（活動交換会）		
9. 漁業無線の免許取得講習会		

	5. 合成洗剤追放講演会，講習会 6. 海辺の定期清掃の実施 7. そ の 他 8. 先進地視察研修	（マスコットプレゼント） ⑧ 暮しを見直す研集会 9. 疲労回復体操の実施と救急法の講習

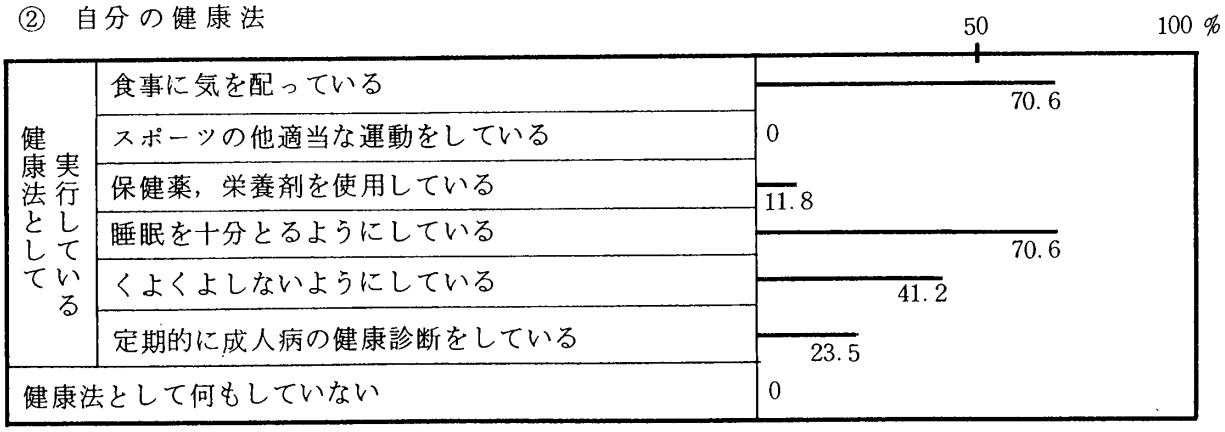
表 9　活動に対する意向（54 年調べ）

① 健康管理に関する考え

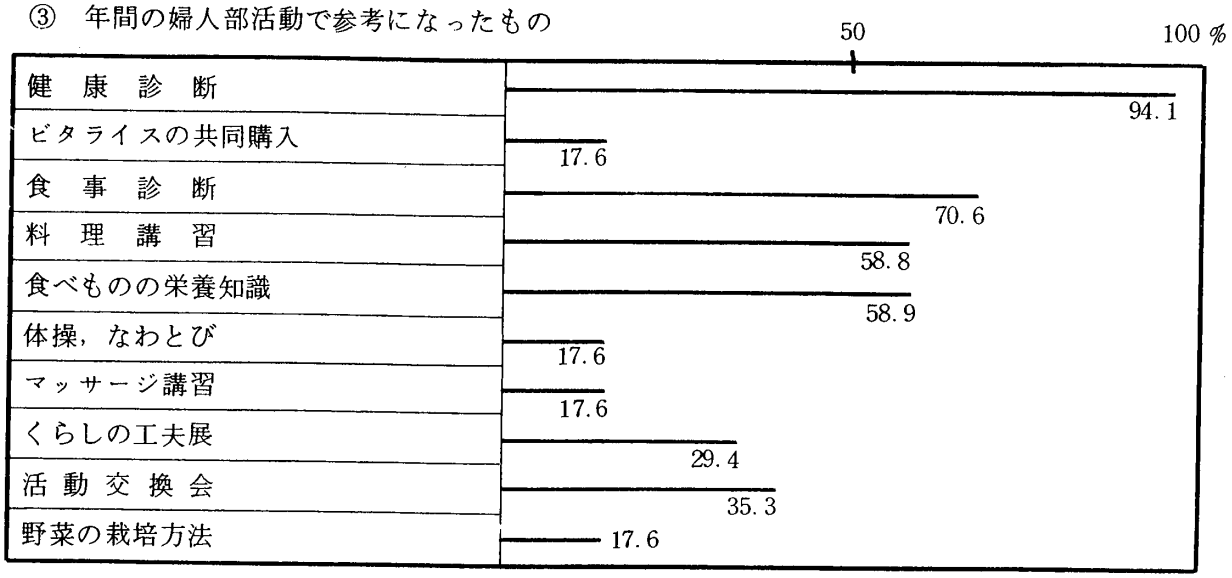
(1) 現在最も関心をもっていること



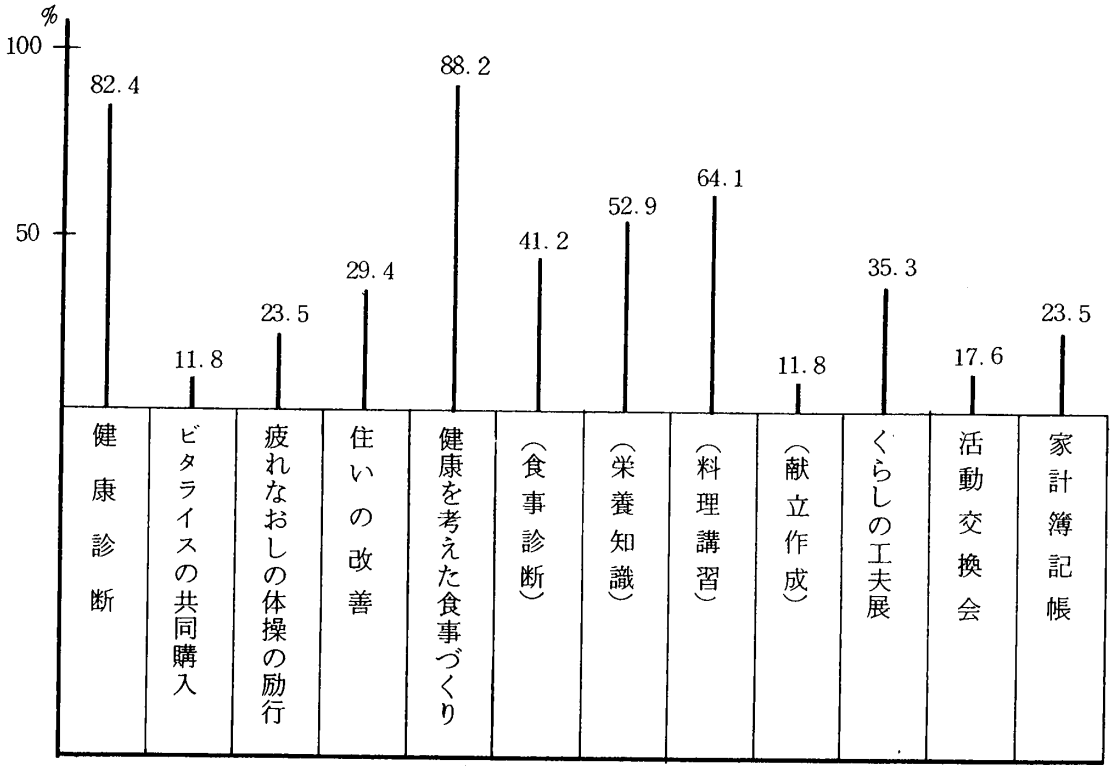
② 自分の健康法



③　年間の婦人部活動で参考になったもの

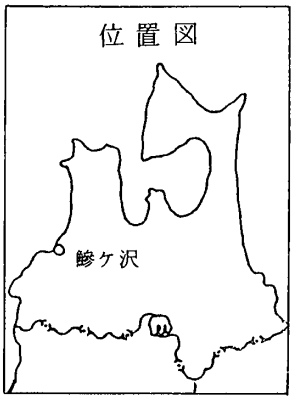


④　今後引き続き実施していきたい活動



4. クルマエビ中間育成試験について

鰺ケ沢漁業研究会
田　浦　勇　作



1. 地域の概要

私達の住む鰺ケ沢町は，日本海に面した人口約19,000人の半農半漁の町です。

北は木造町に接して車力村の七里長浜へと続き，南は深浦町，岩崎村をへて秋田県境へと続くいわゆる西海岸のほぼ中心にあります。

鰺ケ沢港は，津軽藩時代には貿易港として大いに栄えたといわれておりますが，現在は西海岸の重要な漁港として年々整備拡張工事等が行われ，今後の発展が期待されています。

2. 漁業の概要

私達の所属する鰺ケ沢漁協は，正組合員 325 人，准組合員96人，計 421 人で構成されております。

主な漁業は，イカ一本釣，沖合底曳，底建網，定置網，マス延縄，カレイ刺網等を営む典形的な漁船漁業地帯です。

54年の水揚高は，外来船を含めて 1,943 トン，11億 8,200 万円となっております。

魚種別にみますとやりイカ 292 トン，2億 8,500 万円，スルメイカ 273 トン，1億 8,500 万円，カレイ類 188 トン，1億 6,000 万円，ヒラメ68トン，1億 4,000 万円，マス類 132 トン，1億円，その他 990 トン，4億 1,200 万円となっております。

3. 組織の概要及び運営

私達の研究会は，昭和47年 4 月に13名で発足しましたが，その後会員も77名に増加しましたので49年 5 月から部会を，1）海洋部（18名），2）沿岸部（54名），3）栽培漁業部（5名）計77名と 3 つに設けて活動しています。

役員は会長 1 名，部長 3 名，理事 9 名，監事 3 名となっており，会費は年額 1 人 1,200 円で，その他事業に応じ，漁協と町役場から助成を得て運営しています。

主な活動内容は，海洋部は大型船のグループで，イカ一本釣漁業，マスはえ縄漁業等，沿岸部は小型漁船のグループで，底建網，ヤリイカ敷網・一本釣，メバル刺網・一本釣，キスこぎ刺網，マグロ曳釣・はえ縄漁業等の漁具漁法の改良研究をしております。又，栽培漁業部は，外海におけるホタテガイ，ホヤ，ワカメ養殖等の研究を進めてきました。

4. 活動課題選定の動機

西海岸では，今年度から県の助成により，クルマエビ増殖のための資源開発事業が行われ，西海

岸の9漁協によりクルマエビ種苗1,000万尾の中間育成，放流が行われました。

クルマエビは，高価であり，夏場の西海岸の沿岸漁家にとって重要な資源であることから当鰺ケ沢漁協でもそのうちの200万尾の中間育成，放流を行ないました。

また，日本栽培漁業協会宮古事業所から500万尾の種苗を無償配布するという話があり，関係漁協と輸送費を共同負担し，そのうちの100万尾の中間育成，放流も行いました。

中間育成，放流状況は次のとおりです。

(1) 資源開発事業分

1）第1回目

○ 6月10日搬入～6月21日放流（11日間育成）

○搬入時体長 1.43 cm　放流時 1.88 cm

○ 〃 体重 0.020 g　〃 0.056 g

2）第2回目

○ 6月23日搬入～7月5日放流（12日間育成）

○搬入時体長 2.31 cm　放流時 2.49 cm

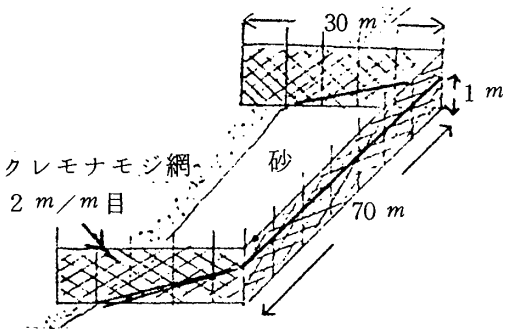
○ 〃 体重 0.094 g　〃 0.113 g

(2) 宮古時業分

○ 8月28日搬入～9月13日放流（15日間育成）

○搬入時体長 1.2 cm　放流時 1.9 cm

〃 体重 0.009 g　〃 0.042 g



第2図　中間育成施設図

中間育成施設は第2図のとおりです。

餌は配合餌料を与え，収容密度は550～800尾／m²としました。

中間育成を実施するに当っては，研究会員，漁協職員が秋田県能代地方へ先進地視察研修を行うなどして，中間育成方法について種々検討しましたが，いざ実際に行ってみると，外敵駆除等色々の問題が出てきました。

今年度の中間育成事業は，初めてのことでもあり，効率的な育成方法等について，余り検討，改良を加える余裕がありませんでしたが，同時に行なわれた他地区に比べ，鰺ケ沢区は漁港内であり，海面は静かで，砂の質もよい方だったので，比較的スムーズに行えたと思われます。

しかしながら，今年実施した場所は，漁港埋立予定地であり，来年度は別の場所で実施しなければなりません。

港外の波の影響の大きな場所で中間育成する場合，育成網の管理等の関係から余り長い期間の育成は望めず，したがって，短い期間で，いかに放流後の目減りに耐えうる種苗を育成するかが問題となってきました。

丁度この折，県水産増殖センターが宮古事業所の種苗を使い，鰺ケ沢地区で飼育試験を実施するとのことであったので，当研究会も漁業後継者対策時業の新技術実証事業として，増殖センター，普及所の指導をうけ，餌料別の成長等の比較試験を行うことになりました。

5. 活動状況及び成果

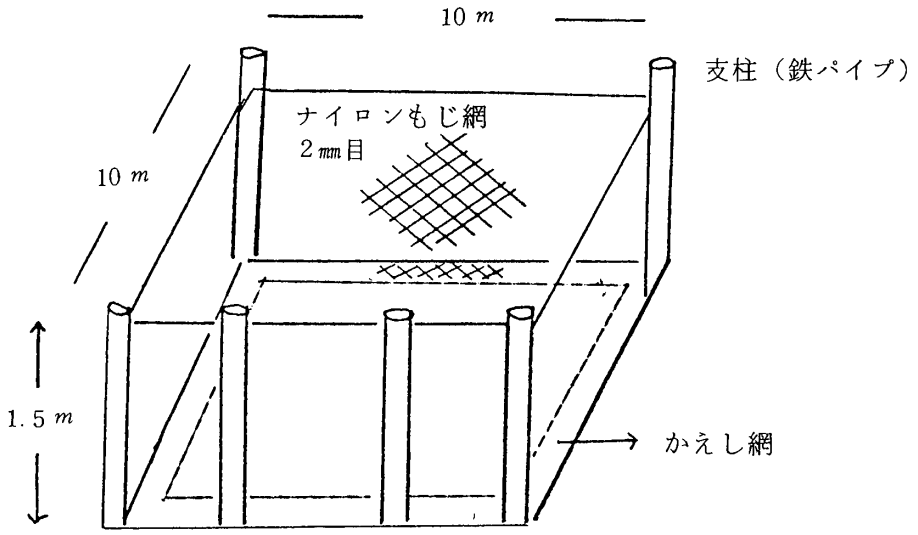
○試験区分は

1）№1囲い網－配合餌料だけ（総重量の40％見当）

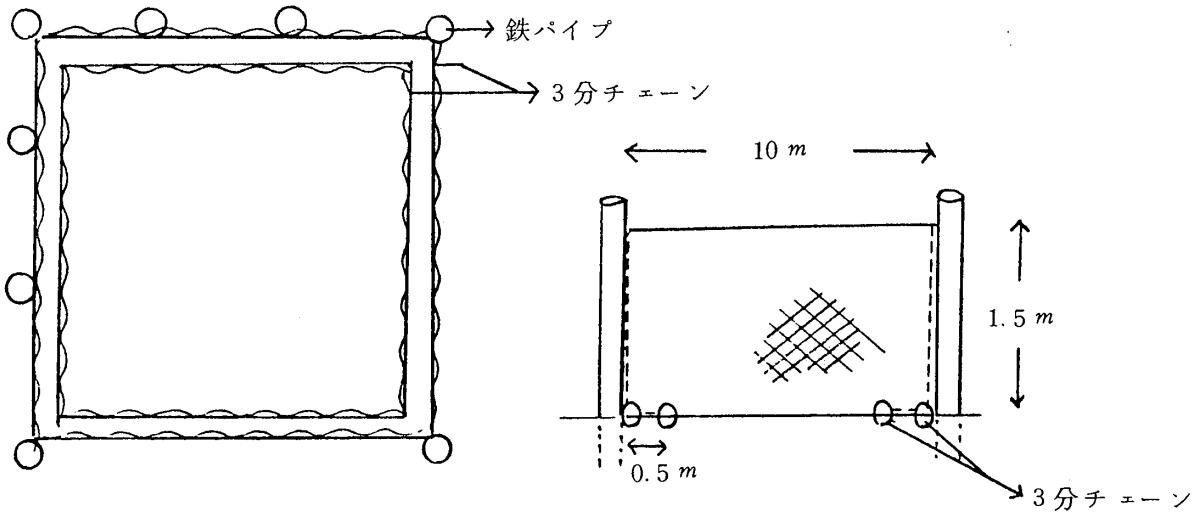
2）№2囲い網－配合餌料と生餌（沖アミ）混合（総重量の20％＋60％）

の2つに区分し沖アミを使用した理由は，これまで他県で行われた試験結果の資料では，アサリ等の貝類及びエビ類が餌料として優れていること，また，比較的入手しやすいことなどによるものです。

施設は別図に示したとおりであり，10×10m角，水深0.5～1.0m，収容時密度540尾／m²です。育成状況及び調査方法は次のとおりです。



全　体　図



平　面　図　　正　面　図

別図　中間育成施設図

餌料投与量表（1日当り）

日数	№1網　配合餌料	№2網　配合餌料＋沖アミミンチ	備　　考
1 〜 10	160 g	80 g ＋ 240 g	1日2回に分けて投与
11 〜 15	240 g	120 g ＋ 360 g	

① 第1回枠取調査（1日目－8／29）

○1網9点，1点2枠

○採取方法－30角ステンレスチリトリ使用

② 第2回枠取調査（5日目－9／2）

○採取方法は前と同じ

③ 第3回枠取調査（11日目－9／8）

○1網9点，1点2枠

○採取方法－50 cm巾タモ網を1 m曳き

④ 第4回枠取調査（15日目－9／12）

○採取方法は前と同じタモ採取

○調　査　結　果

1）生息分布状況及び歩留り

1日目の調査では，種エビは大部分がまだ砂に潜らないで網の沖側部分に集まっているのが観察されましたが2回目（5日目）以降は殆んどが砂に潜ってしまったようでした。

枠取りは，2回目まではステンレスチリトリで行いましたが採取尾数が少なく，3回目以降はタモ網による1 m曳きの枠取りを行いました。しかしながらこの方法でも採れる数は少なく，第1回〜第4回までの枠取り調査では，7〜10％位の低い歩留り計算となりました。

2）成　長　状　況

成長状況は，第3図に示したとおりです。№1，№2の網とも11日目まで殆んど差のない状態であり，15日目には，当初良好と予想した沖アミ混合の場合よりむしろ，配合資料だけの方が大きくなるという結果になりました。

3）網内への混合動物

枠取りにより採取されたクルマエビの外敵と思われる動物は次のようでした。

○第1回目　エビジャコ3尾

○第2回目　エビジャコ若干

　　ハゼ稚魚1尾

○第3回目　エビジャコ15尾

コチ稚魚２尾

○第４回目　エビジャコ 32 尾

カザミ稚仔３尾

カレイ稚魚１尾

フグ稚魚８尾

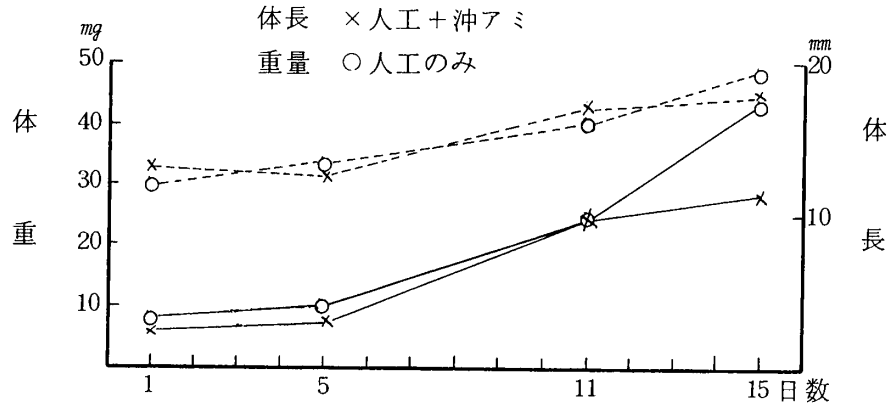
ハゼ稚魚１尾

その他の稚魚２尾

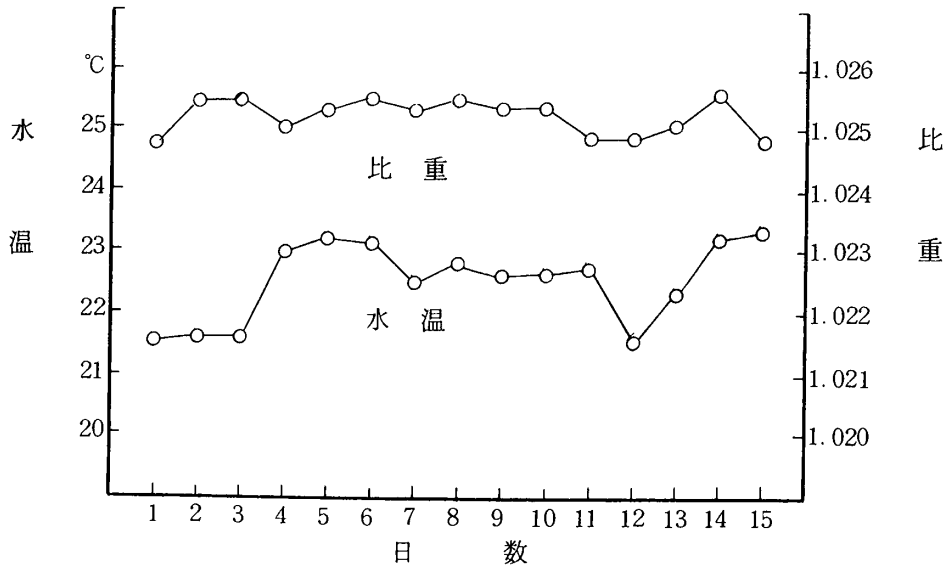
エビジャコが一番多くとれ，日数が多くなるにつれて数も多くなってきています。

15日にフグ等の稚魚が多くなっているのは，時化のため前の日に鉄抗が倒れ網が沈んだためと思われます。

なお，第３回目（９／８）の調査から天然のクルマエビの子供と思われる 0.8 cmから１cm位の大きさのものが少し取れ出しました。



第３図　成 長 状 況 図



第４図　鯵ヶ沢沿岸水温，比重図

今回の試験では，これまで述べたように良い成果は殆んど得られませんでしたが，その原因を考えてみますと，低い歩留り計算については，

1）収容した種苗が小型であり，網目（2 m／m）から外へ出てしまったのではないか。（翌日の調査では，網の外で泳いでいるものが見られている。）

2）網外の外敵に食べられたものではないか。（資料によれば，中間育成での歩留りは，網内の外敵に大きく左右されるといわれています。）

3）採取方法が適当でなかったのではないか，等が考えられます。

また，成長については，天然では，1日当り平均1㎜前後成長するといわれますが，今回の試験では，1日当り平均0.3～0.45㎜と余り良い成長ではありませんでした。

原因としては，

1）与えた餌の量は，1尾当りに換算すると基準量よりは多かったが，面積に比べて餌の量が少なく，網のなか全体に行渡らなかったのではないか。

2）生餌の場合，配合餌料より水に流されやすく，9月に入り育成場も若干波浪がでてきていることから，網外への流出も多かったのではないか。

等が考えられますが，いずれにしても原因は，はっきりしていない状況です。

6. 今後の計画と問題点

クルマエビ中間育成は，種苗をそのまま放流したのでは外敵に捕食されやすいので，砂に潜る能力を増大させ，外敵からの食害を減らし，放流効果を高めるという点で重要なことです。しかし，その効果は，中間育成の歩留りと有効種苗への仕上げに大きく影響されると思われます。

西海岸では，来年度も県の助成でクルマエビ資源開発事業として1,000万尾の中間育成，放流を行う予定とのことです。

鰺ヶ沢漁協でも，今年と同様，このうちの200万尾の中間育成，放流を計画していますが今回の試験結果のように低い歩留り，低成長では，問題があるのでこの資源開発事業の実施より先行して，さらに研究会の課題にとり上げ，究明してゆきたいと思っております。

その他に囲い網周辺への外敵の出現状況や西海岸のような外海に面した場所で中間育成する場合，囲い網への波浪の影響等が問題になります。

また，波浪により，長期間の育成は困難と思われますが，短期間の育成，放流の場合の種苗の効率性の問題等もあり，これらの面についても今後検討して参りたいと考えておりますので関係機関各位の一層のご指導をお願いする次第です。

5. 明るい漁村をめざして

下北郡風間浦村桑畑
さざなみ生活改善グループ
浜　辺　　緑

1. 地域の概況

風間浦村は下北半島北西部に位置し，津軽海峡に面した人口 4,200 人の漁業と出稼ぎに支えられた小さな村です。

500 年の歴史と名泉と言われる下風呂温泉もこの村にあり，湯ぶねにつかりながら，津軽海峡をへだてて北海道の連山や，夜にはいさり火を眺められるとあって，近年は，団体観光客が増加しつつあります。

村の97％が，森林地帯と山岳傾斜地からなり 4 つある集落は，海岸線に沿って走るはまなすラインの受称で親しまれている国道 279 号線にそって点在しております。

就業人口の約 4 割が漁業を営み，ウニ，コンブ，アワビ等が主体の沿岸漁業です。200 カイリ問題で，沿岸漁業の見直しがなされている近年，採る漁業から，造る漁業へと変わりつつあります。中でも村がアワビの増殖に着目し，人工採苗場の建設や大規模増殖場開発事業が進められ，村民も大きな期待を寄せております。

私達のグループのある桑畑地区は，村の中で一番小さく，50世帯です。漁業を中心に，ねこのひたい程の畑を耕やし，自給の糧にしております。社会施設として，公民館の分館と，小学校があるだけです。また商店も食料品を中心としたいわゆる雑貨店が 2 軒ありますが，日常の買物は，8 キロ離れた村の中心である易国間に行きます。しかし，大きな買物は，むつ市まで出かけることが多くなりました。

2. グループ結成の動機

グループは，現在24歳から29歳で，平均年令27歳の若妻で構成されております。2 年前の昭和53年 3 月に 7 名のメンバーにより，村唯一の若妻集団として誕生しました。

それまで部落には，老人クラブ，青年団，姑達が中心の婦人会，漁協婦人部などの組織はありましたが，若妻の組織はありませんでした。したがって隣，近所で顔合わせしても，挨拶をかわす程度のつき合いで，皆寂しく思っていました。特にほとんどが他町村から嫁いできており，家事こそ一部まかされているものの，農漁作業については，言われるままに，お手伝い程度しか出来ない，毎日の生活に疑問を感じておりました。

そんな時に，更生品をとりあげた家庭学級の講習会がありました。若妻が中心に集まり，日頃考えていた学習のことが共通の話題になり，これからも皆で集って行こうと話がまとまりました。その時，生活改善グループのあることも知り，普及所に相談したら，たまたま年一度の地区生活改善

グループの作品展があるとの通知を受け，数人で出かけ，グループや活動の様子を見ることが出来ました。

これがきっかけとなり，部落内の若妻に呼びかけ，さざなみ生活改善グループを結成したのです。

3. 活 動 内 容

私達の主な活動内容は，表1のとおりです。

表1

目 標	活 動 内 容	
家族の和・むらの和	1. 生活技術の修得	○更生衣（リフォーム）の作成 （家庭衣，作業衣，装飾品） ○自給生産物の利用 （副食，おやつ）
	2. 地域活動への参加	○敬老会への協力 （人形劇の上演） ○作品展示会の開催 （2回） ○生活実態調査への協力 ○環境整備の花だんぢくり

なお，くわしく説明しますと，2世代，3世代の家庭が多いことと，部落外から嫁いで来ているために感じる生活習慣や慣習へのとまどいを解決するために，家庭や地域にどう溶けこんでいくかということが，話し合われ，精神的なつながりを大事にした「家庭の和，むらの和」を目標にかかげることにしました。

とりあげたいことが沢山あるなかから，もっとも身近で，一番やりやすい生活技術を身につけることと，地域に少しでも早く溶けこんでいくために積極的に地域活動へ参加するという2つのことを中心に行うことにしました。

具体的にとりあげた内容は，生活改善グループ結成のきっかけともなった更生品の作成です。どこの家庭でもねむっている衣類等に，アイデアを加えて再び活用しようということです。流行おくれや体型に合わなくなったもの，またもらいもので沢山あるタオルや風呂敷を利用して，子供の遊び着や浴用マットなどアイデアによる新しい作品の出来るのは，本人でなければ味わえない喜びです。姑の着物が，座布団やこたつカバーになったものを持ち帰ると，家族も喜んでくれ，私達も次は何にしようかと意欲がわいてきます。

そして何よりも一番の収獲は，家族との共通の話題が出来たということでこの上ないうれしさを体験しました。

活動のもうひとつは，海と畑からの産物を利用して，食卓を楽しくすることと，子供に手づくりのおやつを与えることです。食事づくりは主に私達が担当しておりますので，毎日家族に何を食べ

させたらよいかと悩みの種となっておりました。おじいさん，おばあさん達と若い人では好みがちがうので，料理のパターンもある程度きまりきったものになってしまいます。できれば，安全で栄養のある，そして愛情のこもった手づくりのものを与えようと，考えるようになり，子供のおやつも仕事の合間をみつけて作るようになりました。

クリスマスの時は共同で，ケーキをつくり，デコレーションには自分の畑でとれた，なしの砂糖漬や，りんごジャムなどを飾り，それぞれの家に持ち帰り，家族と共にささやかなパーティーを開いた時は，ほんとうにうれしく，昨日のように思い出されます。

つぎに地域活動への参加についてですが，村の敬老会に，手づくりのぬいぐるみを使って，人形劇の「かちかち山」を上演しました。演出から操作，配役まですべてグループ員が行いました。初めてのこころみなので，何回も練習しましたが，テープに吹きこんだせりふと動作が一致せず苦心しました。たとえば，たぬきが，舌を出す時など，まるめてとめておいたのが，出ずあわてた場面もあります。バックの絵や，その他の小道具づくりも，グループ員一同「ああしよう，こうしよう」という，アイデアでなんとか上演できるようにしました。

当日は，おばあさん，おじいさん達が子供たちだけでなく，嫁も何かやってくれるということで楽しみにしていたようです。それまでは，婦人会がおどりや，歌で慰労してあげていました。それに私達も協力することにしたので，にぎやかになると思ったためです。

なつかしい昔話が，目先の変った人形劇で行なわれたので，びっくりしていたようですが，人形の動きのぎこちなさが，逆にユーモアとなって大笑いになって返って来ました。昔の移動人形芝居「金太と豆蔵」を思い出したとか，大変喜んで花をあげてくれました。

上演するまでは，私達も大変でしたが，おばあさんや，おじいさんの満足そうな顔をみて，やったかいがあったと，一同安堵しました。その後小学校の学芸会にも出演を依頼されました。

次に今年６月，作品展示会を開催しました。グループ活動の紹介とＰＲをかねた「くらしのアイデア作品展とおやつの実演会」です。役場，公民館，農業改良普及所の協力で，部落の分館と中央公民館の２ヶ所で２日にわたって行いました。私達がそれまで活動の中でとり上げて作った工夫作品35点，それに普及所の参考品あわせて50点程の展示を行いました。また自家生産物を使ったおやつの実演，試食会を行ったので，皆にとっては身近なことだけに関心を寄せ，多くの方が見に来てくれました。「なる程」「ステキ」，「これはどのようにして作るのですか」などと感心したり，質問したり，住民の人達の反応をじかに聞いた時，活動を続けてよかったとグループ活動の良さを改めて感じました。

また昨年ですが，改良普及所で生活実態調査を行うことを聞き，自分達の生活を見直す，いい機会だと思い，当地区で行うことを希望しました。この調査は若妻の人数がまだ少ないので，婦人会，漁協婦人部の方たちを対象に行ないましたが，私達はその結果の中から，考え方，感じていることのズレを知ることが出来ました。表２から表６までがその結果です。

表 2

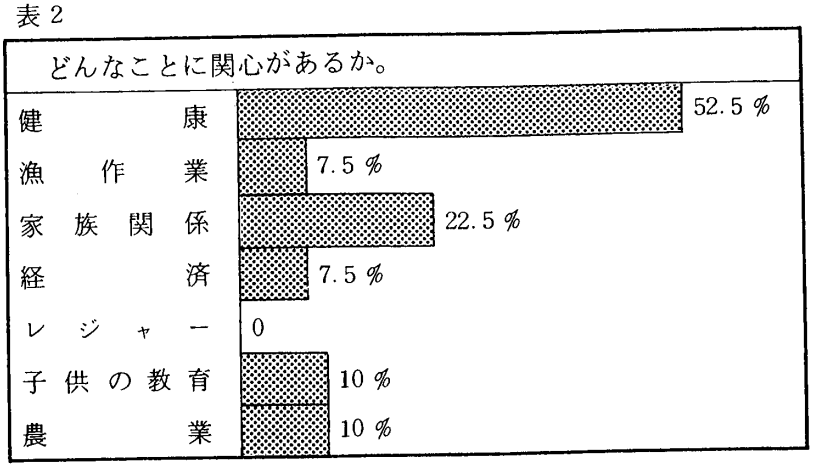


表 3

健康について大切だと思うのは	
○健康をそこなうと収入が減ったり支出がかさむ。	37. 5 %
○健康をそこなうと思っていることが出来なくなる。	22. 5 %
○健康をそこなうと身のまわりの世話をしてくれる人がない。	5. 0 %
○健康をそこなうと家族にめいわくをかける。	42. 5 %
○健康をそこなうと肉体的苦痛が多い。	10. 0 %
○なんとなく大切だと思う。	0 %
○健康はあらゆるものの基礎になる。	70. 0 %

表 4

漁作業に対する婦人の役割	
○婦人も積極的に技術や経営のことを身につける。	22. 5 %
○婦人は家事作業だけを行う。	12. 5 %
○やむをえないので，漁作業に従事する。	5. 0 %
○婦人に適した仕事を責任をもって行う。	42. 5 %
○夫のいうとおり漁作業をする。	7. 5 %
○わからない。	5. 0 %

表 5

漁業後継者について	
○つがせたい	12. 5 %
○別の職につかせたい	20. 0 %
○子供にまかせる	55. 0 %

表6

部落にほしい施設	
○1位　子供の遊び場	42.5％
○2位　スーパー	37.5％
○3位　保育所	30.0％
○4位　診療所	25.0％
○5位　郵便局	5.0％

私達は，この結果を常にふまえて，姑達を理解していくようにつとめなければならないと思っております。

さらに，地区とのつながりを持ったのは，環境づくりの一環として行った，焼却炉の設置，移動花だんづくりと公民館分館へリフォーム作品を寄付したことです。焼却炉と花だんは婦人会が中心に行いましたが，私達も参加し，協力をおしみませんでした。

リフォーム作品の寄付品は，公民館，分館を皆に気持よく利用してもらおうとストッキングから作った造花や，玄関マット，実習につかうなべつかみなどです。

4. 問　題　点

以上これまでの活動を振りかえってみましたが，前にものべましたように活動を始めてまだ3年目，実績というものは何もありません。子供が小さく，育児に追われながらの活動ですので家族の協力，理解があっても活動には限界があります。

第1として，毎月1回の集会も昨年は，4名の出産があり，流会になることもありました。その時は，1冊のノート「こんにちは，赤ちゃん」を作って近況や，思っていることを何でも気軽に書いて回覧し，グループの「和」を保ちました。しかし出産は今後も予想されることです。その時にどのように活動していったらよいか不安ものこります。

第2として，生活実態調査の結果にもありましたように，子供の遊び場の問題があげられます。バイパスにより旧道の交通量が少なくなったとはいえ，遊ぶ場所がないため，道路が子供の遊び場になっています。また保育所も，現在子供の数が少ないことから隣の易国間までバスで行っていますが，おくり迎えが大変です。せめて託児所でもいいから部落内にあれば，と思います。

5. 今後の取り組み

ここ当面は，今まで取り上げてきたリフォームと，自家生産物の活用を中心にとりくむつもりですが，あくまでグループの活動だけにおわることなく，婦人部や，老人クラブ等他の集団との交流を通しながら地域とのつながりを強めて行きたいと思います。

また，昔からある行事食，郷土食の作り方を教えてもらう機会を多く作ること。

子供の遊び場の問題について，具体化するように働きかけること。

そして，他の部落にも私達のような生活改善グループが出来るように働きかけて行きたいと思い

ます。

今年開催した作品展は行政機関の指導を得て，今後も継続し，地域の発展に少しでも寄与できればと念願しています。

最後に，私達は主婦として半人前，グループ活動もこれからです。目標の「和」を大切にしながら社会の一員として明るい村づくりを推進したいと思いますので，なお一層の御指導をお願い申し上げます。

6. ヤリイカ産卵保護試験について

小泊漁協青年部
葛　西　洋　二

1. 地域の概要

私達の村，小泊は，本州日本海側の最北端，津軽半島の一端にあり，日本海北部では数少ない港を有しており，下前との2地区によって構成されています。

村の人口は 6,000 人，戸数 1,300 戸で，このうち，漁家数が 650 戸で全戸数の約50％が専業漁家です。

2. 漁業の概要

私達が所属している小泊漁業協同組合は，組合員 551 名，うち正組合員は 391 名でスルメイカ一本釣漁業およびメバル刺網・一本釣漁業を主体とし，ほかに日本海マス漁業ならびにヤリイカ漁業などで成り立っています。

昭和54年度の漁協販売取扱い高は，数量 3,900 トン，金額16億 5,400 万円となっています。

所属漁船数

3トン未満	3 ～ 5	5 ～ 10	10 ～ 20	20 ～ 50	50 ～	合　計
338	59	40	13	9	7	466 隻

主な漁業時期別経営体数及び水揚高

漁業名	月 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	月 12	隻数	漁船階層	水揚高千円
スルメイカ一本釣	―					―	―	―	―	―	―	―	113	3トン～	368,000
ヤリイカ 定置			―	―	―								27	3～10トン	61,862
ヤリイカ 棒受			―	―	―								69		
マス 流網			―	―	―								10	7～19トン	345,498
マス 延縄			―	―	―								25	5～30トン	
メバル 刺網						―	―	―					40	4～19トン	418,337
メバル 1本釣	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	93	2～ 9トン	

3. 組織と運営

私達の研究会は，昭和33年1月に設立し，今年で満23年を経過しておりますが，主な研究活動に

は先進地技術導入，漁具・漁法の改良，漁業経営の改善等があり，これらに力を入れてきています。

また，漁閑期には，他の団体と協力して漁港周辺の清掃作業にも参画するなど，積極的な活動を展開しております。

現在，当研究会は，会員61名をもって構成されており，活動費は年間1人当り 2,000 円の会費と漁協，村役場からの助成金等をあわせ，約60万円をもって運営されています。

4. 活動課題選定の動機

小泊地先のヤリイカは，3～5月にかけて産卵のために接岸するので，その産卵群を対象に定置網および棒受網が操業され，漁獲されています。

しかしながら，昭和46年をピークに年々来遊が不安定となり，漁獲量の減少もみられてきています。

そこで，当地先におけるヤリイカ資源の増大を図るため，昭和53年度に県の漁業後継者育成対策事業の一環として，ヤリイカを対象とした産卵保護施設の設置により増殖効果をあげている富山県黒部漁協へ技術交流のために出向き，その技術を修得し，さらに同年実証事業として取り上げてもらい，積極的にその増殖対策と取組んだのです。

第1年目の試験結果につきましては，昨年の実績発表大会において発表したとおりですが，初年度としては，産卵付着が見られるなど，その効果が実証されたものの，シケ等の影響によるムシロの流出，鉄枠の変形などの施設の破損があったので，第2年目はこれらの改善を行って更に増殖効果の向上を図るべく，試験を実施したものです。

5. 活動状況および成果

ヤリイカ産卵保護施設は，これまでにヤリイカ漁場として全く利用していなかった砂浜海域に施設を設置し，産卵群を謂集させる，いわゆる魚礁的効果をねらうと共に，巣箱へ産卵させてその保護育成を行い，資源の増大を図ろうという目的で実施しているものです。

昨年実施した結果では，シケ等の影響により産卵巣箱の破損が相当多く見られたこと，施設周辺へのヤリイカ来遊量が少なく，その設置効果を十分把握することができなかったこと等であったので，これらの課題を中心に第2年目の試験を実施しましたが，その実施状況は，次のとおりでした。

(1) 施設の設置期間

昭和55年3月28日～9月2日まで。

(2) 設　置　場　所

小泊地先　（七ツ滝，青岩，七ツ石沖の水深18～20メートル，底質，砂）

(3) 施設の規模および構造　（別図のとおり）

はえなわ式（幹綱 100 メートル），3カ統，巣箱18個（1個の規格，長さ 1.5 ×巾 1.2 ×高さ 0.9 メートル）

(4) 試験・観察項目

① 産卵付着状況

② ふ化の状況

③ 施設の破損状況

④ 漁獲量調査

(5) 試験・観察の結果

第2年目の試験実施にあたっては，事前に研究会員全員による検討会を行い，施設の構造に改良を加え，設置場所を拡大のうえ実施することにしました。

その内容は，次のとおりです。

① 施設の構造等

昨年の試験の結果，シケ等により巣箱の鉄枠が変形したり，ムシロのはく離流出が目立ったので，巣箱の大きさを長さ1.5メーメル，巾1.2メートル，高さ0.9メートルと昨年の半分にすることとしました。（53年度の巣箱の大きさ；1.8 m × 1.5 m × 1.2 m）

② 設置場所の拡大

昨年は，七ツ滝，青岩沖の2ヶ所に施設を設置し，試験を実施しましたが，今年は，例年，他地先より漁期が若干遅れ，しかも，来遊量の少ないと言われる七ツ石沖において，果たして，産卵が行なわれるものかどうかを知るため，一カ所（一カ統）増やし，試験を実施することとしました。

イ) 産卵付着状況調査（4月24日および5月8日の2回実施）

A．全巣箱を船上に引揚げて調査・観察することは不可能であったので，沖側および岸側の各1巣箱を引揚げ，目視観察を行いました。

B．付着数の確認にあたっては，全付着卵のうを計数することは無理であったので，20×20 cm角内の卵のうを計数し，この数字を使って付着数の確認を行いました。

（400 cm²当り，120本付着）

C．ヤリイカ卵のうの付着は，殆んどが巣箱内側の天井部分に認められたので，付着の割合を目視により行って，各施設における付着数を算出してみました。

（1個当りの天井部分面積；18,000 cm²）

その結果は，次のとおりでした。

○七　ツ　滝　沖

（18,000 cm² × 目視結果，天井面積の50％程度付着 × 6巣箱）

16,200本 = 54,000 cm² ÷ 400 cm² × 120本

○青　岩　沖

（18,000 cm² × 目視結果，天井面積の30％程度付着 × 6巣箱）

9,720本 = 32,400 cm² ÷ 400 cm² × 120本

○七　ツ　石　沖

（18,000 cm² × 目視結果，天井面積の2％程度付着 × 6巣箱）

648本 = 2,160 cm² ÷ 400 cm² × 120本

合計　約27,000本の付着が見られた。

ロ) ふ化状況調査（5月31日および6月6日の2回実施）

A．5月31日の第1回調査では，ふ化は確認されませんでしたが，常時ふ化の状況を観察ができるよう小泊港の沖合約100メートル地点に設置しておいた巣箱での観察の結果（6月6日），ふ化しているところが確認されましたので，沖合各施設においても6月6日以降，順次ふ化したものと思われました。

B．5月31日の第1回調査時において3地先から標本採取したヤリイカ卵を県水産試験場へ持って行き，その発生経過について調べてもらったところ，次のとおり，確認されました。

○七ツ滝，青岩沖のヤリイカ卵

• 発生後37～38日経過したもの。

○七ツ石沖のヤリイカ卵

• 発生後5～6日に死亡したもの。

以上の結果から，産卵された時期を逆算してみたところ，大体4月20日～25日頃であることが確認されました。

ハ) 施設の破損状況調査

産卵付着，ふ化状況調査を4回にわたって実施している間，施設の破損状況についてもあわせて調査を実施しました。

これにつきましては，5月25日から26日にかけて大シケがあり，施設の破損，流出が心配されましたが，その5日後，被害の有無を確認したところ，昨年見られたような巣箱鉄枠の折折れ曲がりは認められなかったものの，産卵床の素材であるムシロのはく離，流出が見られました。

その後も，施設の耐波性について調査するため，9月2日まで海中に設置したまゝにして置きましたが，大したこわれもなくムシロも一部残っているのを確認しております。

また，この時点で，4～5月にかけて調査した結果，付着状況の良くなかった七ツ石沖の施設では，相当数のヤリイカ卵のうの抜殻が付着しているのが確認されておりますのでこの状況から，6月6日以降においても，この地先では，産卵が行なわれたのではないか思われます。

ニ) 漁獲量調査

この試験実施海域では，従来から来遊量が少なく，漁場としては全く利用されていない漁場でしたが，この施設設置による効果が本当にあるのかどうか私達としては，一番知りたいところであります。

昨年も，産卵は行われたものの，果たして魚礁的謂集効果があるのかどうか，その把握に努めたのでありますが，来遊量が少ないなどの理由から十分確めるまでにいたりませんでした。

そこで，今年は，その状況について明らかにするべく，研究会員9名を対象に漁期終了後，操業状況等漁獲量調査を行ってみることにしたわけです。

調査は，図にして示したとおり，漁場を漁区番号で区分した図を作成し，調査対象者9名

に配布して日別の操業海区，漁獲数量の記入をお願いし集計してみました。

その結果は，次のとおりでした。

A．調査者9名の棒受網

による総漁獲量 ―――→ 6,719 箱 （4 Kg入） 26,876 Kg

（これは，漁協管内棒受網漁獲量の約29％にあたる。）

B．調査者9名の試験

実施海域での漁獲量 ―→ 742 箱（4 Kg入れ） 2,968 Kg

となっていますが，この9名による操業状況についてみると，海区番号85の海域における操業が最も多く，漁獲量も延べ73隻で 3,072 箱（12.3トン）と9名による総漁獲量の約半分をこの海域で漁獲しています。

この小泊岬沖漁場は，従来から地先ヤリイカ漁場の中心漁場となっているところであり，漁期間を通じて操業が繰返される漁場ですが，操業開始が多少遅れる横泊方面においても漁獲されるようになり，次第に南下してくると昔から言われています。

その傾向を示すものかどうかは解りませんが，漁区番号図の13海区では，4月24日から5月7日までの間，延べ14隻で 667 箱（2.7トン）漁獲しており，また，9. 23. 29. 36海区を中心に4月10日以降5月13日までの間，748 箱（約3トン）を漁獲しております。

次に，試験実施海域周辺での漁獲状況については次のとおりありますが，従来からこの海域では漁場形成がされず，漁獲が皆無に近い所と言われています。

操業隻数が延べ2～5隻と少ないのですが，

- ○七ツ滝沖（漁区番号43） 4/12～24 262 箱（1,048 Kg）
- ○青岩沖（漁区番号61） 4/17. 18 163 箱（ 652 Kg）
- ○七ツ石沖（漁区番号80） 4/17. 18. 20 317 箱（1,268 Kg）

を漁獲しており，特に，七ツ滝沖では4月12. 13日に1隻最高60～130箱，青岩沖では，4月17日に 120 箱，また，七ツ石沖でも4月17日に 300 箱漁獲した船があり，施設を設置することにより漁場が形成され，しかも，産卵が行われることが解りました。

従って今回の調査結果からは，施設の設置効果を十分示す結果が得られたと思っています。

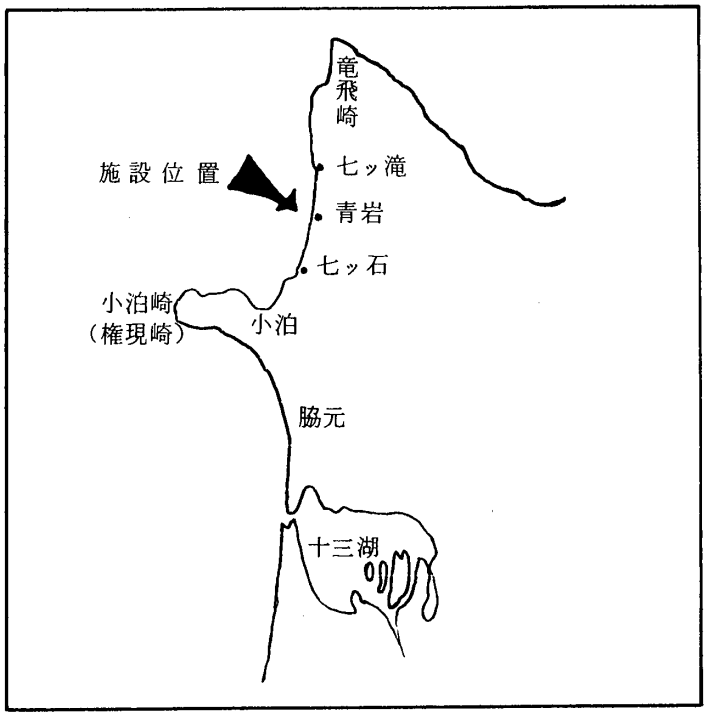
6. 波 及 効 果

日本海におけるヤリイカ漁業は，スルメイカに次ぐ重要魚種であり，最近のスルメイカの不漁により，ますます依存度が大きくなってきておりますが，各地区においてもヤリイカ資源を増やそうと言う機運が次第に高まってきています。

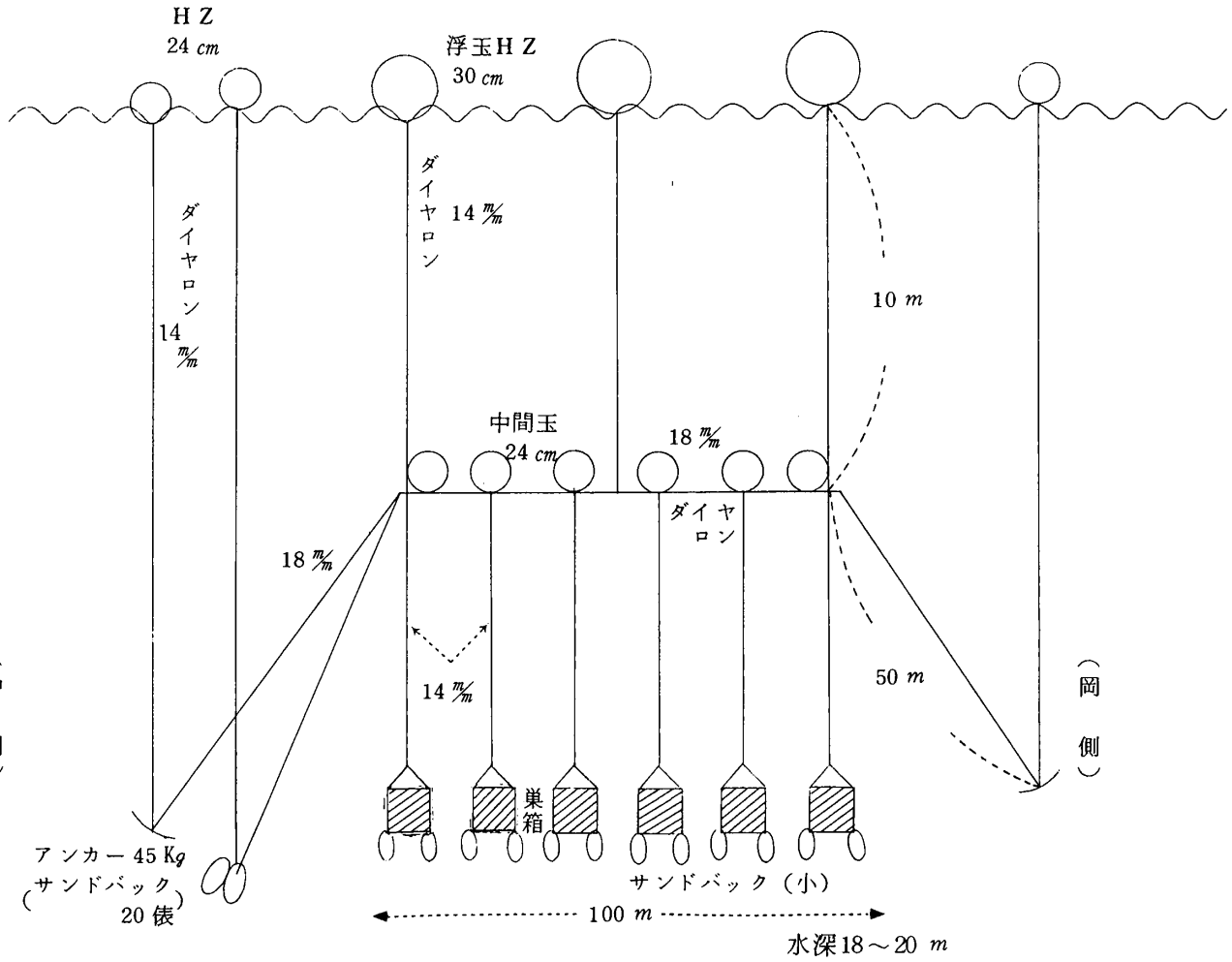
試験研究機関においては，このヤリイカを対象とした大規模増殖場開発事業のための調査が実施されているように聞いておりますが，将来の事業化に備え自分達でもできる研究活動課題があると考えておりますので，色々課題を設定しながら，今後も積極的にヤリイカ増殖と取組んで行きたいと思っています。

7. 今後の計画と問題点

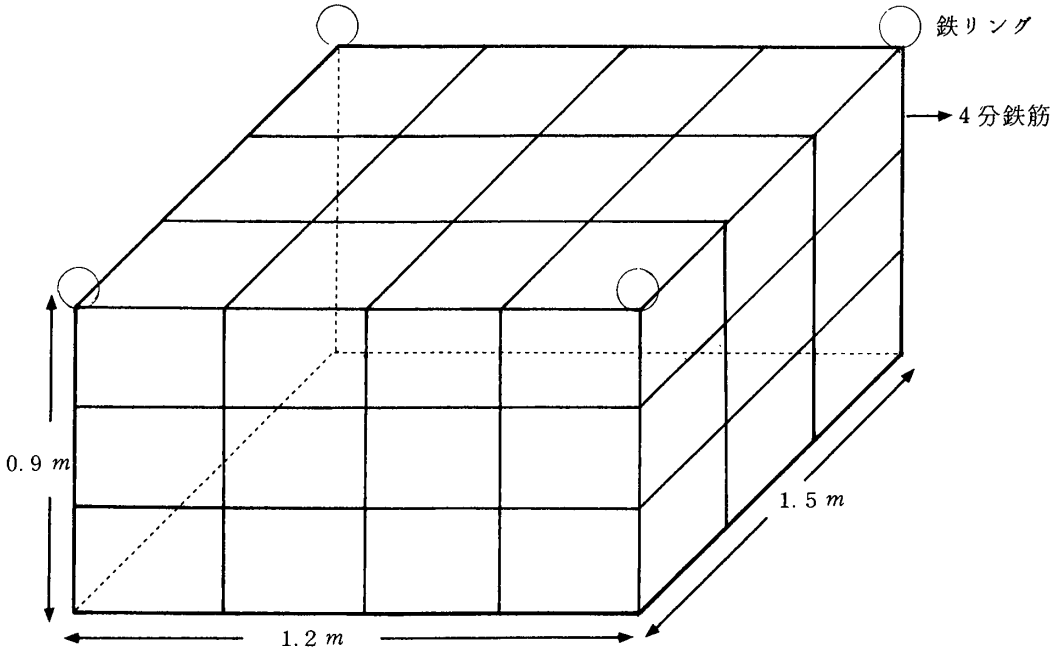
今回の調査結果から一応の設置効果が認められるに至っておりますが，巣箱の産卵素材であるムシロのはく離流出等の破損が依然として見られるので，ムシロ流出防止のため，網地を被覆するなどの検討を行い，更に改良を行って増殖効果向上のため試験を継続して実施する予定ですので，普及所等関係機関の御指導，御協力をお願いする次第です。



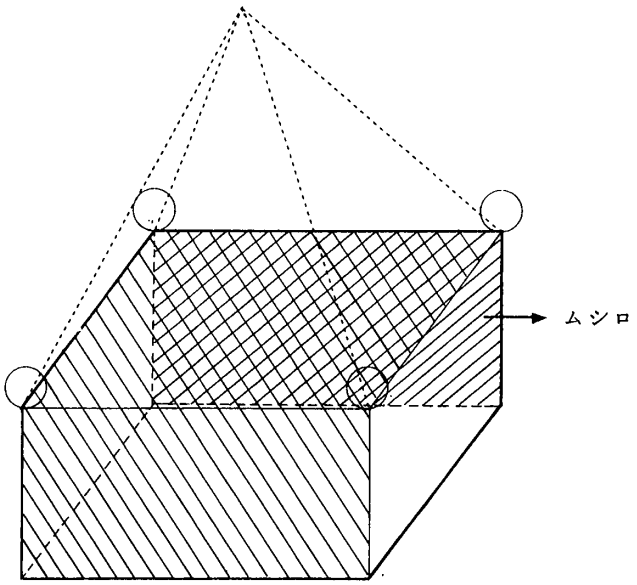
第1図　施設設置場所



第2図　ヤリイカ産卵保護施設図

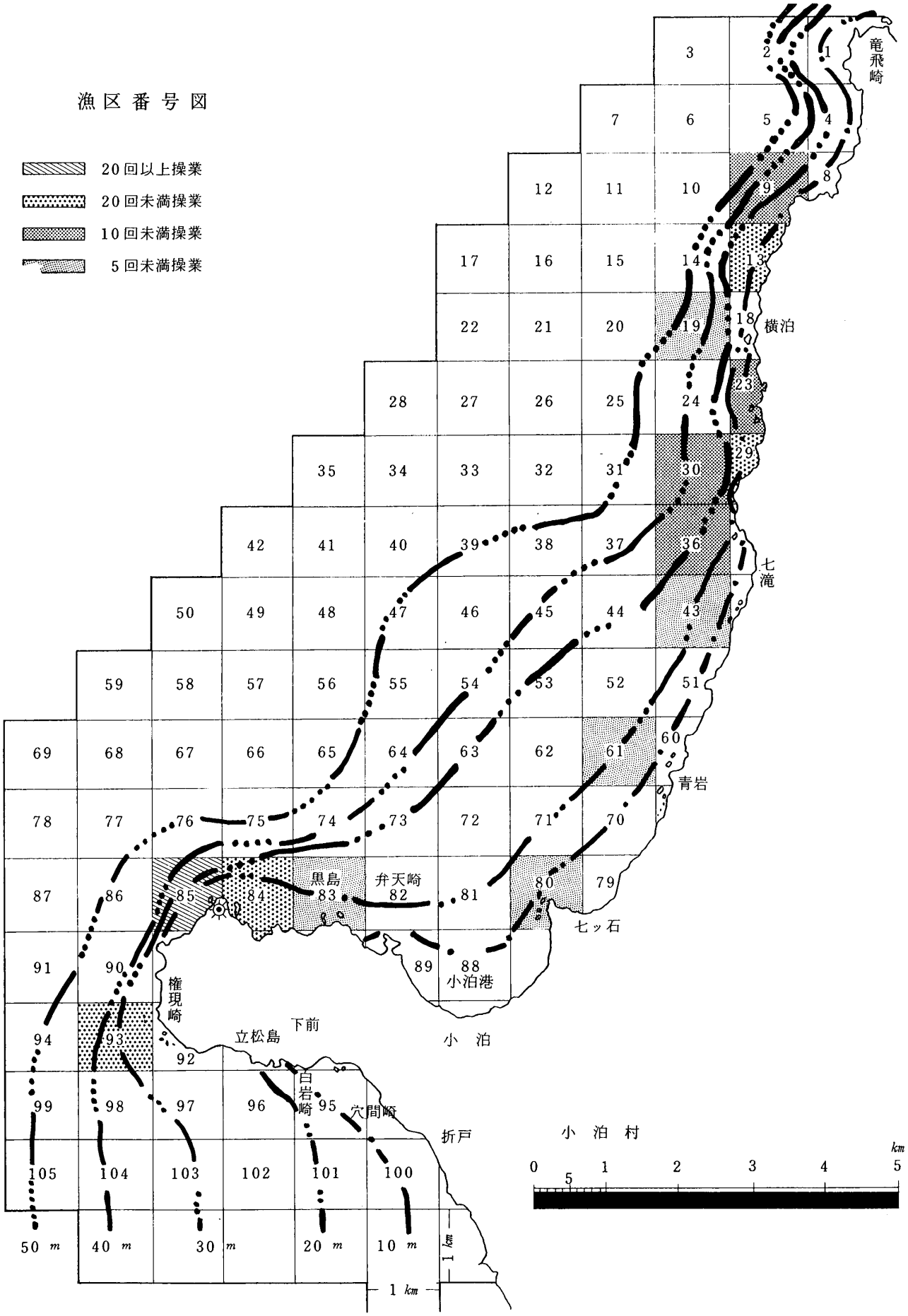


巣 箱 枠 図



巣 箱 図

第3図 巣箱仕様図


漁区番号図
20回以上操業
20回未満操業
10回未満操業
5回未満操業
竜飛崎
横泊
七滝
青岩
七ッ石
黒島
弁天崎
小泊港
小泊
権現崎
立松島
下前
白岩崎
穴間崎
折戸
小泊村
50 m
40 m
30 m
20 m
10 m
1 km
0 1 2 3 4 5 km

7. 私達の生活改善活動

岩崎村漁協　沢辺婦人部
堀　内　信　子

1. 地域の概要

西津軽郡岩崎村は，日本海に面する青森県の南端に位置しており，秋田県との県境になっております。世帯数 1,151 戸，人口 4,249 名の小さな村で，7つの集落からなっております。

2. 漁業の概要

私達の住んでおります沢辺地区は，世帯数 130 戸で，ほとんどが漁業と農業の兼業です。組合員は 107 名で，主な漁業は，漁協自営のタイ，マグロ，ブリを対象とする大型定置網2ケ統と，組合員によるヤリイカ小型定置網8ケ統，その他無動力船によるワカメ，エゴノリ，サザエ，アワビなどの磯漁業が行なわれております。

3. 漁協婦人部の活動

現在の婦人部員は80名で，主な活動は漁協結成時に，組合が困った時に少しでも手助けしようと始めた箱貯金が，現在も続いています。合わせて月々の国民年金の集金も婦人部が引き受けています。また婦人部の漁業面での活動は，岩ノリの養殖です。ノリ島を組合から借り受け，部員が交代でノリ採りを行なっています。昨年は不漁だったので，今年に期待をかけ，かせいソーダをまき，みんなで岩の掃除も実施しました。この岩ノリからの収入が，私達婦人部の活動費になっています。

4. 生活改善グループ結成の動機

漁協婦人部の活動の中で，もっと生活改善の勉強もしたいという気持ちを，多くの部員がもってはいるものの，これまでは，なかなか実行することができませんでした。

そこで，少人数でも生活改善のことを勉強したいと考えていたところ，生活改善グループがあることを知りました。

どこの家庭でも，押入の隅に型が古くなったり，小さくなって着られなくなった洋服やオーバーなどが押し込められていることと思います。私も押入の整理をするたびに，今年こそは処分しようと思いながら，やはり捨てきれず，またしまいこんでしまいます。

4年程前に，鰺ケ沢地区農業改良普及所から，くらしの工夫展に，何か出品してほしいと声がかかったのを機会に，若い人たちに呼びかけ，リフォーム（更生品）を出品するようになりました。それからは毎年，押入の中で眠っている古いものを引張り出しては，古いオーバーから子供用ガウンに，婦人用の古いスーツから子供用の服に作り変えたり，さまざまに工夫をこらして，すばらしい創作品を出品するようになり，たくさんの賞もいただきました。

自分ひとりで工夫がつかない時は，お互いに相談し合い，知恵を借りたり貸したりして，自然に仲間ができてまいりました。

昨年の12月に，西北五生活改善グループによる「くらしを変えるカッチャの集い」に招かれ，出席しました折，大勢のグループの会員がいることと，グループで家庭生活管理や自作した野菜などの料理講習など，いろいろ勉強していることを知りました。

私達も，このようなグループがあったらと話し合い，リフォームで知りあった仲間たちに呼びかけて，今年の4月から平均年令32.3才の若い人達15名による沢辺生活改善グループを，発足しました。

5. 生活改善グループとしての活動

私達沢辺生活改善グループは，鯵ケ沢地区生活改善グループ連絡協議会にも所属し，そこの活動計画（別添資料①）を受け，また自分たちの計画といっしょに，さまざまなことを勉強してきました。

まず4月には，農業改良普及所の野菜専門の先生をお迎えして，野菜の作り方の指導を受けました。野菜作りは，基本がいちばん大切であり，土づくりのお話から始められ，ほうれん草，その他8種類の野菜の例を上げて指導してもらいました。

8月には，生活改良普及員の指導により，夏野菜の利用講習会を開きました。基礎的調理知識として，材料の切り方，だしのとり方，味のつけ方など，日常使いなれていることですが，とても参考になりました。

また，珍らしい野菜「つるむらさき」を利用した料理5種類も指導していただきました。この「つるむらさき」は，ビタミンAが多量に含まれていて，とても健康によい野菜だということで，鯵ケ沢地区のグループみんなで種を分け合って作付したものです。しかしながら見たことも，聞いたこともない南方の野菜ですから，非常によく育ったものの，どうして食べたらよいかわかりませんでしたが，指導していただいた料理は，とてもおいしく食べることができました。そして，購習を受けたことを基本にして，毎日の食事に役立てております。

9月には，五所川原市民体育館に於て，第5回西北五地区農漁家生活改善グループ健康増進競技会があり，誘い合って参加いたしました。バランスのとれた栄養カード合わせなど，生活改善グループでなければできない競技会でした。

このほか農業改良普及所から，「一日これだけ食べましょう」と，わかりやすく絵で表わした栄養ごよみ表をいただき，台所の見やすいところへ貼っておき，栄養のバランスを考えながら食事の仕度をするように努力しております。

また私たちグループでは，リフォーム教室で学んだことを，沢辺の人たちにも教えてあげようと，私達が先生になり「ミニスカート利用の買物袋づくり」をやったり，家庭内の整理に役立つようにと，はぎれやダンボール箱を利用して，新聞紙入れやオモチャ箱をつくって活用しています。

また，私達の村でも4,5年前まではワカメを採取し集荷しておりましたが，この頃は，養殖ワカメや加工ワカメにおされて，ほとんど自家で使用するぐらいより採取しておりません。干ワカメに

して子供たちに送っても，いなかのワカメは堅いからと敬遠されるし，なんとか自分達で加工ワカメができないものかと，グループの人達とも話し合っておりました。鯵ケ沢の水産業改良普及所へ相談したところ，さっそく八戸から10種類以上もある加工方法の資料を，とりよせて下さいました。とてもていねいに説明してありましたので，グループだけでなく漁協婦人部全員に配布したらどうかと，組合へ相談したところ，心よく協力して下さいました。西洋紙の裏表５枚にもなるものを，80人分無償でコピーして下さいましたので，みなさんに配布して大変喜んでいただきました。

私も湯通し塩蔵ワカメを加工してみました。岩塩が手に入りませんでしたので，食塩で試作してみましたが，水分が出てきますので，来年は岩塩を手に入れて作ってみたいと思っています。ワカメの冷凍は手軽に出来て，大変よいと思いますが，塩干ワカメはあまりよく出来ませんでした。

6. 沢辺部落の生活実態調査の実施

沢辺部落の生活状況を把握し，今後の生活改善のあり方を考えようと，昨年から農業改良普及所に協力し，アンケート調査をし，話し合いをしてきましたが，今年は，グループ員みんなで分担し，各戸訪問でアンケート調査をしました。

その調査結果の主なものをあげてみますと，次のとおりです。（別添資料②）

この調査結果をもとにして，近いうちに部落内で話し合うことになっております。

7. 今後の計画

私達漁家の主婦は，主人の手助けをすることはもちろんのことですが，家族の健康や主婦として，多くの知識を身につけることも大切だと思います。

農漁家のよさを生かしたくらしの工夫など，生活改善について，今後さらに勉強したいと考えております。

なお，農産物ばかりでなく，海からとれる魚や海草の加工食品や保存食の工夫も勉強したいと思います。

また，生活実態調査でわかった生活の問題や，沢辺地区の問題点にも目を向け，地域に根ざした活動をグループだけでなく，婦人部や部落にも広げていきたいと考えております。

最後に，このグループが結成するにあたり，積極的に御指導下さいました生活改良普及員のみなさんに，心からお礼申し上げますとともに，水産業改良普及員のみなさまの御協力下さいましたことを感謝致します。

これからもよろしく御指導下さいますようお願い致します。

〈資料①〉

昭和55.年度　鯵ケ沢地区生活改善グループ連絡協議会活動計画

事　業　名	内　容	期　日
毎日やさいをたべよう運動	1日8種類のやさい摂取を目標に全グループ員が1年間記録をつける。	4 ～ 3月
自給やさいの栽培と やさいの調理技術交換会	自給やさいの計画的作付と野菜の調理技術交換会	7月・8月
先進地との交流会	グループ活動を活発にするために他域区と活動事例の交換交流をはかる。	6月5日
婦人病予防講習会	婦人病についての知識を得る。	1月中旬
第12回くらしの工夫展	米の消費拡大・更生衣の技術交換 他団体へグループ活動のピーアール	2月下旬
基礎的調理技術講習会	基礎的調理技術の習得 (材料の切り方・だしのとり方・味つけ・その他)	8月
施設への慰問	秋野菜を持参し，慰問 (はくさい・大根)	11月下旬
いけ花教室	室内をかざる　いけ花	12月下旬
西北五 健康増進競技会	体力向上 他地区との交流	9月上旬
西北五 暮らしをかえるかっちゃの集い	グループ活動の実績発表 他地区との交流	12月上旬

〈資料②〉

沢辺生活調査の結果（S 55.9月）

(1)　出稼ぎ状況（回答75戸）

出稼ぎに行っている	43戸	57.3％
出稼ぎに行っていない	32戸	42.7％

〈出稼ぎに行っている人〉

経営主	31人	72.1％
後継者	11人	25.6％
老人	1人	2.3％

〈出稼ぎ先〉

北海道	33人	76.7％
関東	5人	11.6％
北陸	3人	7.0％

(2) 日稼ぎ状況（回答73戸）

日稼ぎに行っている	36 戸	49.3 %
日稼ぎに行っていない	37 戸	50.7 %

〈日稼ぎに行っている人〉

主婦	20 人	55.6 %
嫁	4 人	11.1 %
経営主	5 人	13.9 %
後継者	2 人	5.6 %
祖父母	3 人	8.4 %

〈仕事の内容〉

農業	14 人	36.8 %
漁業	3 人	7.9 %
土建	17 人	44.7 %
その他	5 人	13.1 %

(3) 農夫症の状況（75戸）

	男		女	
なし	23 人	30.7 %	29 人	38.7 %
農夫症の疑いあり	31	41.3	25	33.3
農夫症	2	2.7	13	17.3
無回答	19	25.3	8	10.7

(4) 体の「冷え」症状

	男		女	
いつもある	6 人	7.9 %	9 人	11.8 %
ときどきある	32	42.1	37	48.7
なし	16	21.1	18	23.7
無回答	23	30.3	12	15.8

(5) 漁作業における主婦の主な仕事

○魚の選別	17 人	22.7 %
○漁具の整理	4 人	5.3 %
○出港準備手伝い	18 人	24.0 %
○海草とり	16 人	21.3 %
○その他	7 人	9.4 %
○特になし	27 人	36.0 %

(6) 漁作業に従事して，いやなこと

項目	男（27人中）		女（48人中）	
1. 時間が不規則	10人	37.0 %	10人	20.8 %
2. 船上作業	0	0.0	2	4.2
3. 水ぬれ	3	11.1	3	6.3
4. 人間関係	1	3.7	2	4.2
5. 漁具の整理	1	3.7	1	2.1
6. 作業環境	2	7.4	2	4.2
7. その他（冷え）	1	3.7	1	2.1
8. 特になし	9	33.3	10	20.8
無回答	5	18.5	22	45.8

(7) 生活時間

項目	漁繁期		漁閑期	
	男	女	男	女
平均睡眠時間	6時間30分	6時間33分	8時間43分	7時間58分
平均漁作業時間	7時間42分	5時間27分	2時間27分	2時間
平均漁作業外時間	2時間54分	3時間 9分	4時間50分	2時間30分
平均家事作業時間	2時間45分	2時間54分	2時間21分	3時間15分

(8) 家計簿記帳状況

（76戸中）

記帳している	9戸	11.8 %
〃 していない	57	75.0
今後つけたい	5	6.6
無回答	8	10.5

(9) サイフもちは誰か

（76戸中）

経営主	8戸	10.5 %
主婦	55	72.4
おばあさん	6	7.9
おじいさん	3	3.9
若妻	1	1.3
その他	2	2.6
無回答	4	5.3

(10) 部落みんなでやったらよいと思うこと

(環境整備)	男		女		全体	
イ. 部落内のそうじ	8人	28.6%	13人	27.1%	21人	27.6%
ロ. 花だんづくり	1	3.6	3	6.3	4	5.3
ハ. カ，ハエの防除	14	50.	21	43.8	35	46.1
ニ. ゴミ処理	5	17.9	5	10.4	10	13.2
ホ. 遊び場づくり	8	28.6	7	14.6	15	19.7
ヘ. 海や川をよごさない	15	53.6	15	31.3	30	39.5
ト. 冠婚葬祭の簡素化	11	39.3	23	47.9	34	44.7
チ. その他			1	2.1	1	1.3
リ. 特になし	1	3.6	5	10.4	6	7.9
無回答	2	7.1	3	6.3	5	6.6
	(28人)		(48人)		(76人)	

(行事，レクリエーション)	男		女		全体	
イ. 盆おどり	12人	42.9%	26人	54.2%	38人	50 %
ロ. 運動会	7	25.0	14	29.2	21	27.6
ハ. 祭り，神楽	5	17.9	14	29.2	19	25.
ニ. 旅行	10	35.7	13	27.1	23	30.3
ホ. 花見	4	14.3	3	6.3	7	9.2
ヘ. 山登り			3	6.3	3	3.9
ト. 山菜取り			2	4.2	2	2.6
チ. 芸能大会	4	14.3	13	27.1	17	22.4
リ. スポーツ大会	7	25.0	14	29.2	21	27.6
ヌ. その他					0	
ル. 特になし	4	14.3	4	29.2	8	10.5
無回答	4	14.3	4	29.2	8	10.5

(11) 今後，学びたいこと

(生　活　面)	男（28人）		女（48人）		全体（76人）	
食生活に関すること	3人	10.7 %	24人	50.0 %	27人	35.5 %
更生衣の工夫	1	3.6	11	22.9	12	15.8
手　芸	1	3.6	7	14.6	8	10.5
健康に関すること	12	42.9	24	50.0	36	47.4
スポーツ，おどり	2	7.1	7	14.6	9	11.8
人間関係のあり方	6	21.4	9	18.8	15	19.7
子供の教育	7	25.0	15	31.3	22	28.9
家庭管理	4	14.3	7	14.6	11	14.5
無　回　答	4	14.3	5	10.4	9	11.8

(漁業に関すること)	男		女		全　体	
漁業経営	7人	25 (%)	4人	8.3(%)	11人	14.5(%)
増養殖	4	14.3	4	8.3	8	10.5
水産加工	5	17.9	11	22.9	16	21.1
浜の利用方法	4	14.3	4	8.3	8	10.5
漁業技術	12	42.9	6	12.5	18	23.7
そ　の　他	0	0	1	3.6	1	1.3
無　回　答	5	17.9	23	47.9	28	36.8

(農業に関すること)	男		女		全　体	
農業経営	9人	32.1(%)	8人	16.7(%)	17人	22.4(%)
畑作，やさい	5	17.9	19	39.6	24	31.6
果　樹	1	3.6	4	8.3	5	6.6
水　稲	0	0	5	10.4	5	6.6
後継者対策	8	28.6	1	2.1	9	11.8
水田再編	5	17.9	6	12.5	11	14.5
そ　の　他	4	14.3	1	2.1	5	6.6
無　回　答	6	21.4	14	29.2	20	26.3

8. サケマス増殖の歩み

老部川内水面漁協
相 内 俊 哉

1. 地域の概要

私達の住んでいる老部地区は，東通村大字白糠に属し東通村の南端に位置し，村役場のある下北の中心地むつ市から約38㎞のところにあり，南側は上北郡六ヶ所村に接している。

2. 漁業の概要

老部川内水面漁協は昭和36年3月，組合員62名で発足した。当初はアユ，ウグイ，イワナ，ヤマメの漁獲が主で，そのかたわらサクラマスのふ化放流事業が細々と行われていた。

その後次第に組合加入者が増加し，現在は組合員数196名で，理事5名，監事3名を中心に全組合員で老部川でのヤマメ，サクラマス，サケの人工ふ化放流事業を積極的に取り組んでおり，昭和54年度の事業収益は1,136万円となっている。

また老部川の「中ノ又沢」は，昭和38年にサクラマスの保護水面に設定され，組合員一同魚属の保護管理の撤底を図っている。

3. 活動課題選定の動機

老部はその昔，アイヌの言葉でオイ，ペチと呼ばれその意味は「魚の群れる川」と云われている。また古老も戦前はかなりのサケ，マスが群れをなし川のいたる処に産卵床が見られたと云っている。

しかし昭和22年頃からサケ，マスの遡上も除々に減少しはじめ，昭和36年頃にはサクラマスは或る程度遡上するものの，サケはその影を見ることさえ無くなった。

その理由として

(1) 密漁による乱獲
(2) 砂利採取による産卵場の荒廃
(3) 森林伐採による影地帯の減少と水位の低下
(4) 河川工事による流水の質的変化

等があげられる。

私達組合員としては極端に減少したサケ，マス遡上の現状をまのあたりに体験し，ふ化放流どころか組合運営も危ぶまれるような状態であった。

昭和44年，県の助成でふ化場，蓄養池，管理舎が新設されたのを機会に，再び昔の「魚の群れる川」として蘇がえらせようと，サケ，マスふ化放流事業を組合員一致団結して推進することにした。

4. 活動状況及び成果

(1) サクラマスふ化放流事業

サクラマス増殖事業は組合発足以前の昭和34年に数尾のサクラマスを試験的に採卵したのが始まりで，現在までふ化放流事業を継続してきた。当時は経験不足でしかも技術的に幼稚で，またふ化施設も貧弱で卵，稚魚の管理には大変苦労した。冬期間などふ化場まで2㎞の雪路をスキーやカンジキをはいて行き，また雨台風によって施設を流失した事もあった。

昭和36年，県水試から採卵ふ化管理技術指導を受けて以来，技術も向上し表1のとおり成果があがって来た。

表1. サクラマス人工採卵実績

年	採捕尾数			雌親魚使用料	人採卵数(粒)
	雌	雄	合計		
43				11	19,618
44	17	0	17	17	56,840
45	39	6	45	32	112,000
46	58	6	64	38	139,567
47	97	13	110	81	241,704
48	208	28	236	85	325,362
49	75	15	90	47	136,676
50	65	20	85	34	99,450
51	148	16	164	105	304,815
52	105	16	121	87	237,000
53	2	0	2	1	2,500
54	215	25	240	99	297,000

老部川のサクラマスは，例年7月中旬頃から溯上し始め，河川に2～3ケ月帯留し10月上旬～中旬に産卵床を作って産卵する。組合では産卵床が作られる以前の8月～9月にかけ，特別採捕の許可を受けて漁獲し蓄養池で飼育管理を行い，雌雄の成熟を待って9月下旬～10月中旬に人工採卵を実施している。

老部川に溯上するサクラマスの雌雄の対比は，9：1の割合で，雌がだんぜん多く，雄の不足をきたすことから雄は全尾数蓄養を続け，1尾を3～4回放精させる。人工ふ化率はその年の水温，気温，成熟等によって多少異なるが，例年では受精率90～95％，生残率85～90％となっている。

県水試の調査結果では，老部川と地元海面（白糠沿岸）とは一つのサクラマス生態系と見なす事が出来，老部川に溯上した親魚一尾が次第に110尾のサクラマスを生産したものと推定している。また地元海面におけるサクラマス漁獲量も年変動はあるものの，70トン台を維持していると

ころから，私達のふ化放流事業も沿岸漁業生産に貢献しているものと確信している。

(2) 海産親サケによるふ化放流事業

海面，内水面のサケ漁業はふ化放流事業が活発に行われてこそなり立つものと考える。数年前までのふ化放流事業の実情は，内水面漁協に依存されて来たと云っても過言ではない。私達の老部川でも溯上するサケが少なく親魚を確保する事が如何に困難である事を肌で感じ取っている。

この様な現状を打開するため，海面漁協の協力を得てサケ増殖を推進しなければならないとの観点から，昭和48年から海産親魚によるふ化事業に取り組んだ。

第一段階として，虫の良い話であったが，むつ普及所の協力のもとに，東通村太平洋沿岸の漁協及び定置業者に海産親サケの無償提供をお願いした。その頃はサケの漁獲も今程でなく，また年末にかけて魚価高騰の時期でもあり，「この魚価の高い時期に無償なんてとんでもない」と反応は良くなかったが，その中で一定置業者（尻労地区）は「我々は定置網で色々な魚を獲って来た。今後も獲らなくてはならない。またこの仕事を息子に引きつぎたいと考えている。その為には増やして獲る漁業に転要しなければと日頃から考えていた。サケは何尾でも提供するから増殖振興に役立たせてほしい」との有難たい申し出があり同年11月下旬，老部川漁協として初めての海産親サケによる採卵を実施した。

河川のサクラマスについては充分な経験があるものの，海産親サケの採卵は技術的に未知であったが，先ず実行をモットーにむつ普及所と合同で現地採卵を実施した。受精直後卵をプラスチック容器に収容し，ふ化場まで28㎞をトラック輸送した。結果的にはふ化率は悪く雌41尾から16万粒採卵したが，翌年の放流は10.5万尾に止まった。これはトラック輸送によって卵に衝撃や動揺をあたえたことによるものと反省し，受精直後卵の輸送は不適当との判断から昭和49年には現地での採卵を中止し，親魚（死魚）を老部ふ化場まで運び15万粒採卵したが受精率が悪く，翌年の放流実績はゼロに終った。その原因には次の事が考えられた。

(イ) 親魚の死後時間経過（3～4時間後であった）

(ロ) 時間経過による雄の精子放出減少

(ハ) トラック輸送のための振動（悪路）による卵の異常。

(ニ) 雌雄の成熟度差の関係

特に(ニ)の雌雄の成熟度の差が大きな原因であると考えられた。したがって海産親サケは雌雄の成熟度差を無くしない限り，効率的な受精卵は望めないとの結論に達した。

昭和50，51年には前年の反省から，雄は活魚としてトラック輸送し，蓄養池で蓄養試験を試み，雄の成熟度を待って採卵受精を実施した。この試験結果は成績良好で，雄を蓄養することによって成熟差を解決することが出来た。このように失敗，苦労の連続であったが，この頃から私達のふ化放流に対する意欲と活動実績が沿岸定置業者に認識され，東通村，六ヶ所村の定置業者から「海産親サケを提供するからどんどん放流してくれ」との申し出が合いつぎ，昭和52年には無償で海産親サケ 450尾の提供を受け，採卵数 130万粒，翌年春の放流は 116万尾余となり，海産サケによるふ化放流事業の基礎が築かれた。

昭和53年には県のサケ倍増計画と合いまって，ふ化施設等も拡充され海面漁協，定置業者，刺

網業者の方々の理解ある協力のもとに，海産親サケ使用量も大巾に増加し，昭和54年度の実績は，親ザケ 5,564 尾，採卵数約 1,750 万粒（内卵移出 900 万粒）翌昭和55年春の放流は， 760 万尾に到った。（生残率89.3％）

老部川の溯上サケも順調に増加し始め，昭和54年度は 1,000 尾を越えるまでになった。

なお，昭和55年度計画は，海産親サケ 8,750 尾，採卵数 1,060 万粒の予定になっており，溯上サケも 3,000 尾と予想されている。

河川，海産鮭捕獲採卵表

年度	河川親魚採捕数			海産親魚使用数			採卵数単位 千	放流数単位 千
	♀	♂	計	♀	♂	計		
昭和 48						41	160	105
49						50	150	0
50			5			23	102	92
51			12			32	102	88
52	9	9	18	376	72	448	1,300	1,164
53	111	93	204	2,373	515	2,888	7,767.6	3,780
54	588	417	1,005	4,903	661	5,564	17,456.6	7,557

発眼卵移出

年度＼移出先	馬渕川	新井田川	奥入瀬川	合計
昭和 53	250 万粒	100 万粒		350 万粒
54	450 万粒	250 万粒	200 万粒	900 万粒

(3) 考　　察

(イ) 海産親サケを生かしたままとりあげるために定置業者の船にはキャンバス生簀が常備され，漁業者が雌雄の成熟度を判別して漁港に運んでいる。

(ロ) 当組合では海の状態を見て２トントラックを待機させておく。

(ハ) 各漁協からの連絡を受けてトラックによる海産親サケのピストン輸送が始まる。

(ニ) その日の漁獲量にもよるが，雄は殆んどキャンバス生簀に収容し，活魚として運ぶ。

(ホ) キャンバス生簀には，1.8 m × 1.5 m で２基常備し，１基に20～30尾を収容する。海水は水温，魚の量にもよるが，20～30cmの水位とする。

(注) 酸素は使用していない。

(ヘ) 今までの経験上，キャンバス生簀の水位を20～30cmに保つことによって，走行中の振動等により，充分酸素の補給が出来る。

(ト) 蓄養された雄は３～４回に分けて使用している。

(チ) 昭和54年度には1日で367尾の採卵実績があった。

(リ) 年毎に採卵量が多くなり，アトキンス式ふ化槽から，ボックス型に切替えた。

(ヌ) 溯上期には，河川監視員を常備し，巡回している。

5. 波 及 効 果

(1) 当組合のサクラマス，ヤマメ，サケ人工ふ化事業の成果によって，隣接他村でもヤマメ養殖，サケふ化事業が盛んになった。また漁業者による自主的ふ化施設が増えた。

(2) 海面漁業者は育てる漁業の認識がとみに高まり，漁協，漁民が一体となっての全面協力体制が確立された。

(3) クラブ活動としてサケ，マス増殖を手がける中学校がでて来た。

6. 今後の計画と問題点

(1) 天然サクラマス銀毛の降海及びふ化放流のサクラマス，サケ稚魚放流は4月中旬～5月上旬に行われるが，この時期は海面漁業のコウナゴ敷網操業の盛期であるため，サクラマス，サケの稚魚が相当混獲されるものと考えられる。

したがって稚魚放流時期を延ばす事が考えられるが，その間の管理経費がかさみ，採算がとれない。

(2) サクラマスは日本特有のものと云ってもよく，海面漁業者は一本釣としての依存度が高いので，今後は大巾に増殖を進めるべきと考える。

(3) サケ漁は年変動はあるものの安定型の漁業と思われる。しかし，海面，河川で漁獲される「ブナケ」及び「ガラ」の鮮魚販売には限度があるので，今後加工方法も充分検討する必要がある。

以上ですが，長年にわたり指導，援助下された県水産部，水試，普及所及び関係機関並びに海面漁協，定置業者の方々に厚く御礼申上げると共に，今後も一層の御支援をお願いして私の発表を終ります。

第13表　老部川年別・月別・旬別平均水温

（単位：℃）

		S 38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
1月	上											3.2	2.8	1.8	2.3	1.1	1.1
	中											3.6	2.8	1.8	1.6	0.8	0.8
	下												2.4	2.3	1.3	1.0	1.0
2月	上														1.5	0.9	0.9
	中														1.6	1.0	1.0
	下														2.9	2.0	1.7
3月	上														2.9	2.1	2.1
	中														3.4	3.8	3.8
	下														3.4	4.3	4.3
4月	上							6.2			5.1	6.1	5.7	6.4	4.4	5.2	4.5
	中							6.5			6.8	7.0	7.5	8.0	6.7	6.6	6.2
	下							7.8			9.4	8.8	8.4	8.4	8.0	6.8	7.7
5月	上							9.3			10.8	9.7	9.6	9.9	7.9	8.3	10.0
	中							10.4			11.5	10.9	11.9	10.3	9.4	10.3	10.0
	下	15.9	11.5	10.6	10.7	11.8		10.3	10.5		12.1	12.2	12.3	11.3	12.4	10.0	11.5
6月	上	12.8	12.9	10.3	11.0	13.6		10.7	11.9		13.0	13.4	11.7	13.2	13.7	12.8	11.0
	中	16.3	13.4	11.3	12.3	12.8		12.7			15.1	14.9	13.7	13.2	12.9	11.0	12.7
	下	16.7	14.2	12.9	12.9	14.4		13.9			14.7	15.2	12.8	12.5	12.9	11.9	13.7
7月	上	16.2	16.0	11.7	11.8	14.4		14.9		16.0	16.5	15.9	14.6	12.7	13.2	14.0	15.1
	中	16.3	16.5	11.7	14.3	17.1		15.9		16.7	16.1	16.8	14.3	14.0	15.2	14.8	17.1
	下	19.7	16.2	13.6	15.4	10.1		15.9		18.3	17.5	17.2	20.0	16.6	18.0	17.5	18.9
8月	上	21.6	16.4	14.9	14.7	18.4		19.7		21.5	19.6	20.4	19.5	17.5	17.1	20.0	20.2
	中	19.7	17.7	15.7	15.8	17.6		20.6	19.6	20.1	21.1	21.4	19.3	17.5	16.1	17.8	18.5
	下	21.0	15.9	16.7	16.8	18.3		21.4	21.1	20.9	18.2	17.9	20.9	18.6	16.5	16.4	18.4
9月	上	20.9	15.3	15.8		17.5		21.5	20.5	18.0	16.1	17.0	17.6	18.8	15.3	16.2	15.2
	中	18.6	14.3	14.7		13.9		21.5	20.0	17.1	16.6	16.1	15.9	16.4	13.6	15.7	14.6
	下	16.8	12.7	14.0		12.8		20.1	19.7	16.0	14.8	15.1	15.4	14.4	12.2	14.8	13.7
10月	上	16.7	11.5	12.7		11.8		11.0	18.8	15.6	13.7	12.9	13.1	13.1	11.6	12.4	12.3
	中	14.7	10.8	11.2		11.4		10.6	18.0	14.5	12.8	12.8	11.1	10.7	10.5	11.2	9.4
	下	12.4	10.3	10.3		10.3		10.1	16.6	15.1	11.1	11.0	9.2	9.4	9.6	10.8	8.5
11月	上	8.6	7.8	9.6		8.0		8.6		13.9	8.9	9.2	6.7	7.6	7.3	8.5	6.4
	中	7.0		6.2		5.0				12.0	6.5	6.9	4.9	7.3	6.3	5.1	5.3
	下	6.7	4.2	6.0					10.0	11.3	6.8	6.9	5.8	5.9	4.9	6.1	4.2
12月	上										5.6	2.8	4.0	3.8		4.2	
	中										5.1	2.4	2.1	2.9		4.3	
	下										4.2	1.1	2.1	1.6		2.3	

施設々備の状況

1. さくらますふ化場

昭和44年	蓄養池	162 ㎡	1,512,000円
〃	ふ化場	49.5 ㎡	1,000,000円
〃	管理舎	19.8 ㎡	270,000円
	護岸工事		300,000円
		計	3,082,000円

2. やまめふ化場

昭和49年　稚魚池及管理舎 113.4（木造モルタル平屋）

蓄養池 46.3 ㎡ × 3 面約 139 ㎡

吸水ポンプ一式　10,700,000円

3. 給水施設

昭和53年12月　毎分 6 t　13,000,000円　300 ㎜右線管　L = 1,495 m

4. さけ，ます捕獲施設

昭和54年10月　14,000,000円

5. さけ，ますふ化場

昭和54年12月　鉄骨平屋建 639 ㎡

ボックス式ふ化槽 50 万粒 × 35 槽

養魚池　34.74 ㎡ × 8 面　278 ㎡（内既設 4 面）

稚魚池　92.4 ㎡ × 4 面　370 ㎡　30,700,000円

6. 増収型アトキンス兼1間槽

さくらます用 1 槽 20 万粒 × 10 槽　650,000円

差替え

「豊かな生活をめざした婦人部活動」

岩崎村漁協沢辺婦人部
堀内信子

1　地域の概況

私達が住んでいる岩崎村は、日本海に面し秋田県との県境になつています。村には津軽国定公園を代表すると言われている十二湖があり、海抜1,２３０ｍの雄大な白神山をバックにゆるやかに湾曲した海岸の美しさは、自信をもつて誇ることができます。

岩崎村は、７集落からなり、世帯数1,１４８戸、人口4,１０８人で私達の沢辺地区は、村の最北部に位置し、世帯数１３０戸、人口５６４人です。

そのうち、約８０戸が第２種兼業漁家です。

2　漁業の概要

岩崎村は沿岸漁業が主で、年間約７００ｔの漁獲量があり、漁種は、スルメイカ、ヤリイカ、タラ、カニで、タイ、マグロ、ブリ、サザエ、アワビなども獲れ、それに４年前に放流した鮭がかなり獲れており、今後に期待をかけています。

3　漁協婦人部の活動

昭和３３年１０月に結成し、現在８０名で次のような活動をしております。

(1)　箱貯金と活動資金の調達

貯蓄推進を目的に、結成当時からはじめた箱貯金は、今でも続けております。

又、国民年金の集金と、岩のり採り収入は、私達婦人部の活動費にしています。

(2)　生活改善活動

㋑　働きやすい作業衣の工夫

沢辺部落は、農業と漁業の兼業が多いので、漁作業や農作業に適した働やすい、作業衣がないものが、生活改良普及員に相談したところ、ナイロンタフタを使用した作業衣の作り方を指導してくださいました。

それをもとに、みんなで着用しながら工夫改良し、むれを防ぐために、裏へバス

タオルをつけたり、前掛やズボンを作つたりして、いろいろ研究試作をして、自分達に適したものを作りました。

これを、岩崎村の農産物共進会へ出品展示したところ、漁家はもちろん、農家からも好評で、型紙を分けてやつたり、部員が他の地域へ講師に行つて教えたりして普及させています。

㋺　自給野菜利用による食事の工夫

また、私達のほとんどが、畑をもつているので、計画的に作付した自家菜園の野菜を使つて、料理講習をうけ、健康管理に努めています。この成果を村の文化展や共進会へ出品し、展示と試食を行い、好評を得ました。

㋩　出稼ぎをなくする工夫

出稼ぎを少なくしようと、村では、その対策の一つとして、花木センターをつくり、花木の振興を図ることになつたので、今年は水仙の球根を5,000球植えました。

春には、美しい花を咲かせてくれることでしよう。一大産地化とする夢を持つているので、ぜひ成功させ、出稼ぎをなくし、家族がそろつて働ける地域、一家だんらんのできる家庭となることを願つています。

(3)　水産加工　（塩蔵ワカメの加工）

4～5年前までは、干ワカメを出荷していましたが、売れ行きが悪くなつたので、現在は自家用より作つていません。

良質のワカメの採れる地域でありながら、塩蔵ワカメを買つて食べている人もあるので、なんとか、自分達の手で塩蔵ワカメができないものかと、水産業改良普及所へ相談し、わかりやすく説明してある加工方法の資料をいただき、漁協の協力を得て、婦人部全員に配布したのですが、岩塩が手に入らず、作ることができませんでした。食塩で試作もしてみましたが、水分が出て良いものができません。

そこで、更に村の産業課へ相談したところ、岩塩をお世話して下さいました。

大喜びで、早速20㎏の生ワカメを採取し、仲間と試作し、出来上つたものをみんなで試食したところ、とてもおいしいので、これなら販売もできるのではないかとい

うことになり、村の農業共進会で販売したい旨、申し込みましたところ、村長さんも賛成して下さり、直売コーナーも作つてくれました。

販売するものですから、クキを取り、１００ｇごとに束ね、各自のストッカー(冷凍庫)へ分散して１１月まで保管しておきました。

私達は収入のことよりも、立派な塩蔵ワカメの加工が、自分達にも出来るのだということを、みんなに知つてもらうことを目的にしました。

1束３０円とし、9時に開店したところ、1時間たらずのうちに用意した１００束が売り切れてしまいました。

みんなから、「立派なものを作つた」とほめていただき、買えなかつた人達からは、もつと沢山作つてほしいと来年の注文までいただきました。

私達の手で作り、販売できたことは、とてもうれしいことですが、それ以上にうれしいことは、部員が互いに隣近所や友達に数え合い、沢辺部落ほとんどの人が、塩蔵ワカメの加工ができるようになつたことです。

当地のワカメは、4月下旬採取したものは柔かでおいしいのですが、料理の仕方によつて、酢のものなどに使用する場合は、少し堅い方が良く、5月中旬から下旬に採取するよう、これからは計画をたてて、加工したいと思います。

4　今後の活動

私達、漁家の主婦は、主人の手助けをすることはもちろんですが、家族の健康や、主婦として多くの知識を身につけることも大切です。

農家家の良さを生かした、くらしの工夫の一つとして、塩蔵ワカメの加工に自信を得たので、海から採れる魚貝類や海草の加工、保存食の工夫なども勉強したいと思つています。

今後は、習得した塩蔵ワカメの技術を役立て、海のない所の人達と交換会をしたり、家計費節約に役立てたりしながら、人と人との交流のかけ橋としても、活用していきたいと考えております。

○　１１月の文化展に出品した展示料理

「緑黄色やさい料理アラカルト」

つるむらさき料理	人参料理	かぼちや料理
粕味噌和え	ポタージユスープ	肉詰め蒸し
五目和え	ジヤム	
天婦羅	ホツトケーキ	
サラダ		
包み揚げ		
ゴマ和え		
酢のもの		